

く ほ じり い せき 久 保 尻 遺 跡

— JAみなみ信州竜丘支所新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2021年3月

みなみ信州農業協同組合
長野県飯田市教育委員会

く ぼ じり い せき 久 保 尻 遺 跡

—JAみなみ信州竜丘支所新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2021年3月

みなみ信州農業協同組合
長野県飯田市教育委員会



S1006 出土古墳時代遺物

序

私たちが暮らす飯田市は、河川や断層が形成した段丘と、山麓から緩やかに広がる扇状地が見事に調和した風光明媚の地です。この地は古くから交通の結節点として栄え、他地域の影響を受けながらも独自の歴史や文化を育んできました。

古代から現代に至るまで人の営みが続いてきた飯田市には、遺跡が数多く分布しています。なかでも、国から指定を受けた史跡 飯田古墳群や、史跡 恒川官衙遺跡はそれらの代表例です。私たちは、これらの文化財を大切に守り伝えていかなくてはなりませんが、地中に埋蔵されている文化財については、現代に生きる人々の生活との折り合いのなかで、やむをえず壊されるものもでてきます。そのため、開発の前に発掘調査を行い、調査結果を遺跡の記録として後世に残す必要があります。

このたび、竜丘地区の「久保尻遺跡」において、埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。今回の調査では、古墳時代の大型の竪穴建物が1棟見つかり、多くの遺物が出土しました。また、奈良時代の竪穴建物が3棟発見され、市内でも数少ない奈良時代の集落として把握することができました。遺構から出土した遺物は、この地を治めた有力者の権威を示す鉄の武器であったり、庶民の暮らしを物語る素朴な土器であったりと、人の営みのさまざまな顔を見せてくれます。これらは、地域の歴史を語るうえで貴重な成果となりました。本書はその調査結果を記録するために作成した報告書です。この報告書が永久的に記録として残されるとともに、今後の地域史の解明に活かされることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査に際し多大なるご理解とご協力をいただきました、事業者のみなみ信州農業協同組合様をはじめ、本調査・報告書刊行に関係された皆様に、深く感謝申し上げます。

令和3年3月

飯田市教育委員会
教育長 代田 昭久

例　　言

1 本報告書は、みなみ信州農業協同組合が計画したJA みなみ信州竜丘支所新築工事に伴う埋蔵文化財包蔵地 久保尻遺跡・田中古墳 の緊急発掘調査報告書である。

2 本件は令和元年度（2019 年度）に発掘調査、令和 2 年度（2020 年度）に整理作業及び報告書刊行を行った。

3 調査対象地は長野県飯田市桐林 923 番、同 922 番 1 に所在する。

4 調査略号は、KKJ923 を用いた。

5 発掘調査はみなみ信州農業協同組合から委託を受け、飯田市教育委員会が直営で実施した。調査体制は以下のとおりである。

(1) 調査組織

調査主体者	飯田市教育委員会 教育長 代田 昭久
調査担当者	春日 宇光
作業員	伊藤 和恵 伊東 裕子 今村 文一 木下 由紀子 関島 真由美 樋本 宣子 中田 恵 中村 地香子 久田 誠 福澤 育子 三木 美保 宮内 真理子 森藤 美知子 森山 律子 横前 正富 吉川 悅子

(2) 事務局体制

【令和元年度】

飯田市教育委員会

教育次長	今村 和男
生涯学習・スポーツ課長	北澤 俊規
生涯学習・スポーツ課文化財担当課長	馬場 保之
生涯学習・スポーツ課課長補佐	関島 隆夫
生涯学習・スポーツ課課長補佐兼文化財保護係長	下平 博行
生涯学習・スポーツ課文化財保護係	羽生 俊郎 村山 博則 春日 宇光 佐々木 佑里香 福井 優希 山下 誠一

【令和 2 年度】

飯田市教育委員会

教育次長	今村 和男
地域人育成担当参事兼生涯学習・スポーツ課長	青木 純
生涯学習・スポーツ課文化財担当課長	馬場 保之
生涯学習・スポーツ課課長補佐	関島 隆夫
生涯学習・スポーツ課課長補佐兼文化財担当主幹	宮澤 貴子
生涯学習・スポーツ課課長補佐兼文化財保護係長	下平 博行
生涯学習・スポーツ課文化財保護係	濱谷 恵美子 村山 博則 春日 宇光 佐々木 佑里香

(3) 指導・協力

長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課

6 本件に伴う業務委託は、次のとおりである。

基準点測量・地形測量・標高析出：株式会社小林コンサルタント

金属遺物保存処理：公益財団法人山梨文化財研究所

遺物写真撮影：西大寺フォト

7 本書は春日宇光が執筆し、馬場保之が総括した。

8 整理報告にあたり、下記の諸氏にご指導・ご助言をいただいた。ここに記載のうえ感謝申し上げる。

(敬称略・五十音順)

辻川 哲郎 鈴木 敏則 中里 信之 中嶋 郁夫 平林 大樹 箕浦 純

百瀬 長秀 山口 誠司 山下 誠一

9 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館（飯田市上川路 1004 番）および飯田市上郷考古博物館（飯田市上郷別府 2428 番 1）で保管している。

凡　例

1 遺構には文化庁文化財部記念物課監修 2010 『発掘調査のてびき -集落遺跡発掘編-』 p242「表 9 遺構記号」に基づき以下の略号を用いた。

遺構	記号	遺構	記号	遺構	記号
堅穴建物	SI	土坑	SK	溝	SD
小穴	SP	集石墓	ST	柱列	SA

2 調査区は、世界測地系による飯田市新埋蔵文化財基準メッシュ図（以下、「基準メッシュ」とする。）に基づき設定した。基準メッシュの設定方法については、飯田市教育委員会 2009 『切石遺跡群』に記載されている方法に準拠した。

3 図版中で共通して使用する記号等は、以下のとおりである。

S：岩石、P：土器、遺物出土位置：●、焼土の分布範囲：、炭化物の分布範囲：

4 土器の実測図について、断面の白抜きは土師器・繩文土器・中世陶器を、黒塗りは須恵器を表す。

5 土層観察については小山正忠・竹原秀雄 2015 『新版 標準土色帖』の表示に基づいて記録した。本報告における図版上の記載も上記文献に準拠したうえで、土層番号、土色の略号表記（色相・明度／彩度）、土性の略号表記の順に示した。これに統けて調査担当者の観察に基づく土層の粘性の有無、土のしまりの強弱を表示した。

目 次

口絵

序

例言

凡例

第1章 調査の概要	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 発掘作業及び整理等作業の経過	1
第3節 調査の方法	2
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3節 調査位置と周辺の調査履歴	8
第4節 調査前の状況	8
第3章 調査の成果	10
第1節 基本層序	10
第2節 成果の概要	10
第3節 遺構	11
第4節 遺物	23
第4章 総括	32
第1節 古墳時代の竪穴建物 SI006 について	32
第2節 焼成坑 SK004 について	34
第3節 奈良時代集落とその性格について	35
第4節 まとめと展望	36

写真図版

挿図目次

第1図	調査位置	5
第2図	調査位置及び周辺遺跡	5
第3図	調査区周辺調査履歴	6
第4図	調査前地形図	9
第5図	基本層序	10
第6図	遺構分布図	11
第7図	SI006	12
第8図	SI006 遺物等検出状況	13
第9図	SI005	15
第10図	SI007	16
第11図	SI020	16
第12図	SK003	18
第13図	SK004・008・009 ・ST017・SD002	20
第14図	小穴分布図(1)	21
第15図	小穴分布図(2)	22
第16図	田中古墳付近	22
第17図	SI006出土遺物(1)	24
第18図	SI006出土遺物(2)	25
第19図	SI006出土遺物(3) ・SI005出土遺物	26
第20図	SI007出土遺物 ・SI020出土遺物(1)	28
第21図	SI020出土遺物(2) ・SK003出土遺物・その他出土遺物	29
第22図	竜丘地区の古墳時代大型豎穴建物	32
第23図	飯田市出土の別造り片腸抉を もつ長頸罐	33
第24図	松本市宮の前遺跡土師器焼成坑	34
第25図	搬入品とみられる須恵器	35

写真図版目次

写真図版1	調査前
	調査区全景
写真図版2	SI006 同 北壁際の被熱及び焼土等堆積状況
写真図版3	SI006 南壁付近炭化材検出状況 同 廃絶後投棄遺物出土状況
写真図版4	SI006 土師器杯出土状況 同 鉄鉗・砥石出土状況
写真図版5	SI005 同 須恵器盤・壺等出土状況
写真図版6	SI007 同 カマド内外遺物出土状況
写真図版7	SI020 SK004
写真図版8	SK003 同 土師器出土状況
写真図版9	ST017 調査区南側の小穴群
写真図版10	田中古墳付近(調査前) 同 土層堆積状況
写真図版11	SI006出土土器(1)
写真図版12	SI006出土土器(2) SI006出土鉄器・砥石
写真図版13	久保尻遺跡出土奈良時代土器 SI005出土土器・SI007出土 土器(1)
写真図版14	SI007出土土器(2)・SI020・ SP018・ST017出土土器 SK003出土土器

表目次

第1表	SI006出土鉄鏃計測表	27
第2表	出土土器観察表	30
第3表	小穴一覧表	31

第1章 調査の概要

第1節 調査にいたる経緯

平成31年（令和元年）1月、みなみ信州農業協同組合より事務所の新築工事計画が示され、埋蔵文化財取り扱いについて飯田市教育委員会（以下「市教委」）生涯学習・スポーツ課文化財保護係に照会がされた。当該工事の計画地は埋蔵文化財包蔵地「久保尻遺跡」及び「田中古墳」に該当しているため、埋蔵文化財の保護について両者間で協議を進めたが、文化財保護法第93条の規定に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出が令和元年5月7日付で提出されたことにより工事内容が具体化し、一部箇所で地中の埋蔵文化財が破壊される可能性があることが判明した。これを受け、長野県教育委員会（以下「県教委」）と市教委で保護協議を行った結果、同年5月17日付で県教委から発出された通知により、工事着手前に記録保存のための発掘調査を行う運びとなった。

その後、事業者と市教委で調査に向けて調整を進め、調査は発掘作業から整理等作業まで一貫して市教委が受託することで合意した。調査範囲は地中へ影響が大きい独立基礎及び地中梁の箇所に限定し、掘削が及ばないもしくは軽微につき遺構への影響がないと判断される部分は極力保存に努めることとした。

作業に係る業務委託契約については、事業者であるみなみ信州農業協同組合 代表理事組合長田内市人と飯田市長 牧野光朗の間で令和元年6月7日に締結した。現地での調査終了後、市教委から県教委へ完了・実績報告及び決算等を提出し、同年度分の調査を終了した。その後、調査地では工事が着手された。整理作業は、令和2年4月23日に改めて整理作業及び報告書刊行業務に係る委託契約を締結し、同年度中に飯田市考古資料館にて実施した。

第2節 発掘作業及び整理等作業の経過

1 発掘作業の経過

現地での発掘作業は、令和元年7月17日に開始し、同年8月30日に終了した。

7月17日、重機（バックホウ）を搬入し、表土掘削を開始した。検出面を把握し掘削を進めたところ、竪穴建物（SI005、006、007）、土坑（SK003、004）、溝（SD002）等の遺構を検出した。18日には作業員による作業を開始。重機作業と並行して現場設営を行った。調査区南側事業地内に仮設テントを設置し、器材等を置いた。同時に、仮設トイレ2棟を設置した。7月23日に精査を行い、遺構を検出。同時に遺構の掘削を開始した。7月24日には市教委に職場体験学習で受け入れ中の市内中学生3名が1日作業を行った。7月26日に委託業者による測量作業を行い、調査区に基準点を設置した。これをもとに2m×2mの正方形小区画（グリッド）を設定し、以後は遺構掘削、実測図面の作成、写真記録等を進めた。

SI006は大型の建物であったため、面的な掘り下げに先行してトレーナーを設定して床面までの深さや土層堆積を把握し、埋土を大きく3層に分けて遺物の取り上げを行った。SI020はSI006と重複するが、検出当初はまったく把握できておらず、SI006の記録を進める過程で新たに建物として把握した。

第1章 調査の概要

田中古墳の残骸と推定されていた石碑(三界萬靈塔)の周辺については重機による表土剥ぎを行つた時点で遺構として認識できるものはなく、その後も慎重に精査したが、古墳に関連する遺構は検出されなかつた。

8月30日に現地における作業をすべて終了し、仮設のテント、器材等を撤収した。

11月15日から、事業者の同意を得て、飯田市竜丘公民館1階エントランスで本発掘調査の様子や成果を伝える速報ミニ展示を行い、12月8日から9日にかけて同館で開催された竜丘地区文化祭で専用のブースを設置し、住民に向けて発表を行つた。翌令和2年1月26日には、調査地に近い竜丘地区的桐林集会所で開催された桐林地区文化祭でも同内容の発表を行い、調査成果の周知に努めた。

2 整理等作業の経過

整理作業は令和2年度の約1年間を当初契約期間として実施した。作業は飯田市考古資料館で行い、契約を締結した4月24日以降、他の整理業務との調整を行ひながら断続的に進めた。実施した作業内容は遺物の洗浄、注記、接合・復元、遺物実測、原図の整理及び清書等であり、調査担当者の指示のもとで作業員が行つた。

金属遺物の保存処理と遺物写真撮影は外部に委託した。遺物保存処理は、業者の選定を5月上旬に行い、同25日に業者へ遺物を引き渡した。処理済みの遺物は8月26日に返却され、業者から提出された保存処理時の所見とX線撮影写真を参考に実測を行つた。遺物写真撮影は令和3年1月19日から21にかけて委託業者により実施し、2月4日に写真データの納品を受けた。

報告書刊行にあたつては、調査担当者が原稿の執筆、写真図版の作成を行つた。印刷業者の選定を令和3年2月に行い、同3月に本報告書を刊行した。

第3節 調査の方法

1 調査区とグリッドの設定

調査面積は220m²である。調査地は直前まで畠及び水田として営農されていた。

調査範囲を建物が遺構に影響を与える部分に限定したため、発掘調査区は南北方向に格子状となり、建物の上間部分は未調査箇所として残した。飯田市新埋蔵文化財メッシュ図（飯田市教育委員会2009）に基づく本調査位置の表記はⅧ LC-94 9-45, 14-5 である。

表土掘削を終えた段階で測量を業者に委託し、光波測量機を用いて基準杭の打設を行つた。基準杭の設置後、上記の区画法により、2m×2mの正方形小区画（グリッド）を作業員が手動で設定した。グリッドは、「DY17」のようにアルファベット2文字と2桁の数字で表し、平面図作成及び遺物の取り上げ等の記録単位として用いた。標高の析出も基準杭打設と同時に実行した。

2 遺構の検出・記録、遺物の取り上げ

発掘作業は重機による表土掘削を行い、遺構検出後は人力の掘削へ移行した。

遺構は検出した順に1/50縮尺の見取り図に記入し、「001」から通し番号を付与し、遺構略号に統けて「S1005」のように表記した。なお、小穴（SP）については、遺物が出土した小穴のみに

遺構番号を付した。遺構掘削にあたっては必要に応じて半截し土層堆積状況を記録した。豊穴建物の調査は通常、四分法を採用することが多いが、今次調査では検出した4棟すべてが部分的な調査にとどめたため、畔を残した掘り下げはせず、調査区壁面で土層堆積状況を観察した。出土遺物の取り上げは基本的に遺構単位で行い、建物内の土坑やピット等からの遺物は元の遺構番号に加えて情報を追加して取り上げた。遺構外遺物についてはグリッド単位で取り上げた。SI006から出土した金属遺物は取り上げ直後に応急的なクリーニングを実施し、保存処理まで保管した。

遺構等の図化作業は作業員が行った。調査区平面図、遺構平面図等の作成は基準杭とグリッド釘を基に行った。土層断面図を含む遺構図面は1/20縮尺を基本とし、必要に応じて1/10縮尺の詳細図面を作成した。調査中の写真記録は、調査担当者が撮影を行った。写真機器はデジタル一眼レフカメラ（Nikon D750）を使用した。

3 整理等作業

遺構等の図面類は現地で作成した実測図を基に第二原図を作成のうえ、手作業で清書した。

遺構番号は現地で付した通し番号をそのまま報告まで変更せずに使用することとした。整理報告過程で遺構の種類を変更したものについては、遺構種別の略号のみ変更した。ただし、柱列3基（SA026、SA027、SA028）は、現地では把握していなかったが、整理中に柱列として認識したため、遺構の番号を通し番号の続きから新たに付した。さらに、現地作業で番号が与えられていない小穴（SP）については、整理作業時に新たに通し番号を付した。したがって、026以降の番号で現地作業中に遺物の取り上げや写真記録は行っていない。

出土遺物は須恵器、土師器が主体を占めるが、陶磁器、石器、砥石、金属器も出土した。金属製品を除いたすべてを洗浄し、個別に注記のち、接合・復元・実測・拓本採り等を行った。

注記は微細なものを除き、可能な限り全ての出土遺物に対して行った。注記には自動注記機を用いた。注記する際は、調査略号（KKJ923）、出土遺構名・出土年月日・その他情報の順に、アルファベット、ローマ数字及び漢字を用いて記載した。遺物取り上げ時に出土状況が図化されているものは数字が付されているが、注記では「No.」を省略し、遺構番号の次に数字のみを表記した。SI006については分層して取り上げを行っているため、「上層」「中層」「下層」に区分して注記内容に加えた。接合に際しては市販の接着剤を使用し、欠損部分は石膏を補充して復元した。石膏を補充した部分は水性絵具を用いて着色した。

報告遺物の選定にあたっては、遺構に伴うものを優先した。遺構出土遺物は、完形のもの、全体形状が推定しうる破片及び特徴的な技法等がみられる破片は基本的に報告書に掲載し、図化が困難な程度に微細な遺物については報告対象から除外した。遺構外遺物は報告の優先度を低くし、器種・器形、産地及び年代などが推定できる程度の情報をもつ遺物、あるいは特徴的な遺物を選択した。これらは類似する破片が存在した場合は1点程度に絞っている。

SI006から出土した金属遺物は、整理作業開始後に業者を選定し、委託による保存処理を行った。委託先から返却後、処理時の所見やX線撮影写真を参考に遺物を接合・実測し、図化した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

当遺跡は長野県飯田市竜丘地区桐林地籍に位置する。飯田市は長野県南部の都市であり、標高3000メートル級の高峰が連なる木曽山脈と赤石山脈に挟まれた伊那盆地の南側に位置する。伊那盆地は一般的に「伊那谷」と呼び習わされ、盆地の中央には諏訪湖から発した天竜川が南流する。盆地の北部比較的開ける一方、南部には高峰が少なく天竜川は川幅を狭めて峡谷をつくりながら太平洋へ向かう。この起伏の合間に縫うように主要な交通路が各地へ伸びており、国道152号（秋葉街道）・国道151号（遠州街道）・国道153号（三州街道）によって静岡県西部・愛知県東部、西は中央自動車道・国道256号（清内路街道）によって木曽谷および岐阜県東部にそれぞれ通じる。

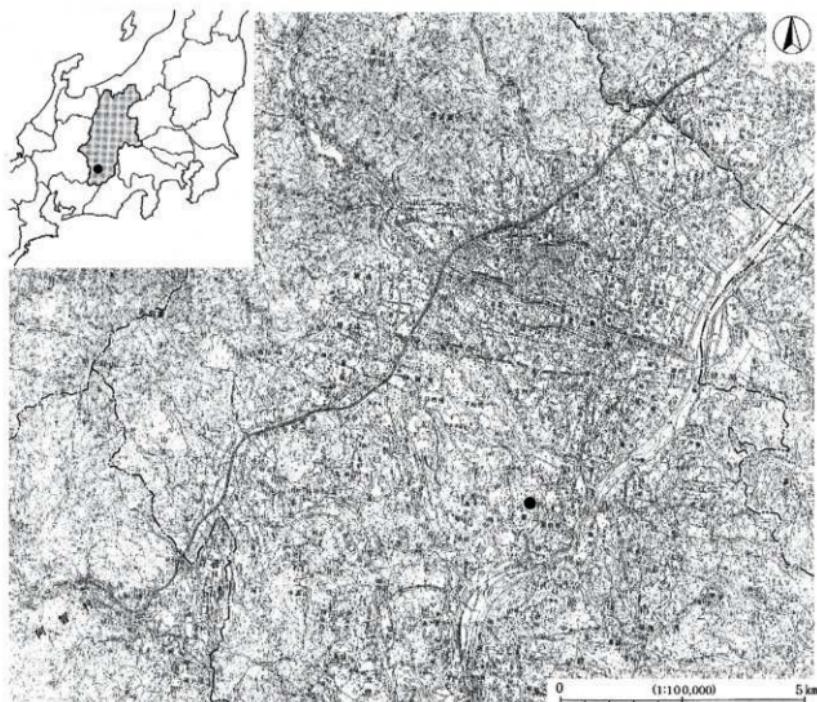
地質環境としては、中部高地から九州まで連続する、日本最大の断層線である中央構造線のすぐ西側に飯田市域の大半が属している。このあたりは領家帯と呼ばれる花崗岩を基盤とする地質構造を特色とする。この基盤岩体の上に河川等の作用で形成された砂礫層や、火山灰等による堆積層が乗ることで基本的な地質構造をなしている。

伊那盆地では、山麓部から天竜川河床の間に比高差約10～20m程度の段丘崖が数段にわたって発達するのが景観上の大きな特色である。段丘の成因は一様ではなく、天竜川や松川の作用による河岸段丘と、断層のずれによって生じた断層崖がある。このように区画された標高差のある平坦面は、念通寺断層付近を境に大きく「上段」（うわだん）と「下段」（しただん）に分かれれる。また、それらの段丘面を木曽山脈の前山から天竜川に向けて流れる小河川が区切ることにより、独立した小地域をいくつも形成している。調査地がある桐林地区もそうして成り立った小地域のひとつであり、「下伊那の地質解説」（下伊那地質誌編集委員会 1976）によると、念通寺断層直下の「低位段丘I」（下段）に区分される面である。上段や下段の一部にかけては、赤土の名で知られる風成ローム層が堆積し、その下は木曽山脈方面から土石流等により運搬されてきた花崗岩礫が占める。一方、氾濫原が広がる最下段では赤土はほとんどみられず、天竜川に由来する砂礫層が主体となる。

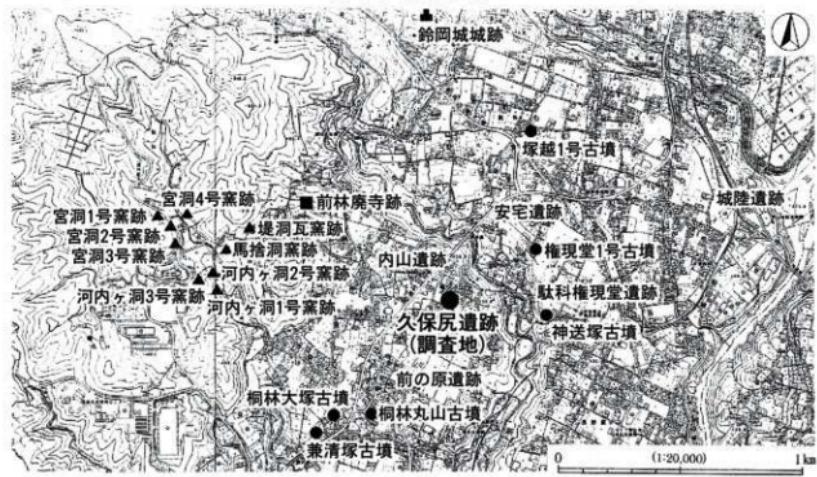
久保尻遺跡の所在地は、現在の行政区分において竜丘地区に含まれる。当地区は、飯田市街地から5kmほど南の天竜川右岸の地域で、北の松尾地区までみられる天竜川右岸の低位段丘はなくなり、狭隘な渓谷となって南流していく。竜丘地区は木曽山脈方向から天竜川に向けて流れてくる小河川が形成した谷地形や段丘崖によってさらにいくつかの小地域に区切られ、駄野、桐林、時又、上川路の各小地区にわかれる。その中で、北側を新川、南側を駄沢川によって分断された段丘平坦面が桐林の主な区域である。主要交通路である国道151号線が通り、沿線に店舗や住宅が比較的密集し、学校や公民館が立地するなど、竜丘の文化経済的な中心をなしている。遺跡は桐林地籍の北寄りの新川右岸域に広がる。北側は内山遺跡、南側は前の原遺跡に分かれるが、地形的には連続する。遺跡の範囲は南北約500m、東西幅約250m程度で、標高は内山遺跡と接する国道付近で最も高く、そこから天竜川の方へ緩やかに傾斜していく。北端と南端の標高差は10m前後である。

第2節 歴史的環境

旧石器時代は、木曽山脈側の山麓を中心に先人の活動の痕跡が認められる。特に山本地区の竹佐中原遺跡・石子原遺跡は後期旧石器時代の初頭頃とされ、日本列島最古級の遺跡として著名である。



第1図 調査区位置



第2図 調査区位置および周辺遺跡



第3図 調査区周辺調査履歴

縄文時代を迎えると、座光寺地区の美女遺跡等で早期の集落が形成されている。中期に入ると爆発的に集落が増加し、段丘面から中山間地域に至るまで、各所で大規模な集落が営まれた。続く中期後葉は当地域が最も隆盛を極めた時期で、竜丘地区的前の原遺跡にも該期の集落が存在する。

弥生時代の前期の様相はほとんど不明である。中期から低位段丘上に集落が営まれるのに対し、後期になると集落が中位段丘から高所の山麓部にまで広がることが判明している。竜丘地区では安宅遺跡や小池遺跡などで後期の集落が確認されている。

古墳時代の前期には松尾地区、伊賀良地区で前方後方墳が少数築造されるにとどまるが、中期中葉以降は爆発的に古墳が増加する。近年、中期から後期にかけて飯田市域を中心に築造された前方後円墳・帆立貝形古墳を一体的にとらえ、「飯田古墳群」と呼称している。当古墳群を特徴づけるのが、馬の埋葬および馬具の出土例の多さである。これらから、大陸から導入された馬の飼育や生産を管理する集団の存在が想定されており、当時のヤマト王権の政策を顕著に伝えるものとして、前方後円墳11基と帆立貝形古墳2基が国史跡に指定されている。竜丘地区では消滅したものを含めて140基の古墳が築造されており、松尾、座光寺とともに古墳の密度が高い地域である。ここでは中期から後期にかけ、地区内の駄科、桐林、塚原、上川路にそれぞれ前方後円墳を中心とする首長系譜が認められる。桐林では中期の首長墓として、大塚、兼清塚、丸山の各古墳が、駄科では権現堂1号古墳がそれぞれ階層の上位に位置する。後期には、桐林に前方後円墳は築造されず、畿内型の横穴式石室をもつ駄科の塚越1号古墳に集約される。このほか、段丘の端部や内側にも古墳が点在し、銛留短甲を出土した駄科の神送塚古墳など、円墳も注目される。ただし、これら墓域と集落との関係は十分に解明されていない。桐林では、前の原遺跡（1988年度）で調査された古墳時代中期の間仕切りをもつ大型の竪穴建物（26号住居）が、首長層の居宅の可能性をもつ建物として注目される。

奈良時代に律令制が導入されると当地域は東山道信濃国伊那郡に編入され、座光寺地区に郡衙が置かれた。同地区の恒川遺跡群では、7世紀後半から10世紀にかけて、正倉院や祭祀遺構などが確認されており、恒川官衙遺跡として国史跡に指定されている。市内で奈良時代の集落が確認された事例は恒川官衙遺跡周辺を除くと比較的少ないが、駄科の安宅遺跡では該期の竪穴建物に加え、掘立柱建物や杭列が規則的に配置されており、専用窯の出土も併せて一般の集落とは異なる居宅的な要素が認められる。桐林の小池遺跡でも奈良～平安期の集落が判明している。一方、桐林の前林廃寺からは奈良時代の古瓦や瓦塔が出土しており、開善寺付近に存在したとみられる上川路廃寺と並び、当地域でも最古段階の仏教寺院として注目される。また、駒沢川が流れる西側の山間部には須恵器を生産した窯が密集する。なかでも発掘調査が実施された宮洞3号窯は、奈良時代前半に操業した当地域で最も古い段階の須恵器窯とされる。桐林に分布するこれらの遺跡は、律令期に当地域が伊那郡内の一拠点として、古墳時代から引き続き重要な地位を保ち続けたことを意味する。

中世の竜丘地区は伊賀良庄に属し、初めは北条氏、のちに信濃国守護・小笠原氏の支配下におかれ、鎌倉時代には当地方唯一の古刹である開善寺が創建された。室町～戦国期にかけて小笠原氏は鈴岡・松尾・深志の三家に分かれて勢力争いを展開した。竜丘地区を崖下に見下ろす段丘の突端に築造された鈴岡城は、広大な城域に大規模な郭や空堀、土塁等を巡らせた中世城郭である。城主の鈴岡小笠原氏は、河川を挟んで対岸にある松尾城を根拠とする松尾小笠原氏と対峙した。天文23年（1554）、武田氏の侵攻により伊那谷の領主はこれに服属する。その後、天正10年（1582）に織田氏の侵攻を受けて小笠原氏の城郭は廃城となる。その後、徳川氏、豊臣氏などによる支配を経て、近世になると幕藩体制のもとで飯田藩の所領となつた。最後は堀氏の統治を経て明治時代を迎えた。

第3節 調査区位置と周辺の調査履歴

今次調査区は、国道 151 号付近から 100 m ほど東側の段丘内側寄りの地点である。遺跡内には、新川沿いの断崖上から段丘内側にかけて古墳が多く分布する。今次調査箇所付近に田中古墳が所在するほか、北羽場古墳群、久保在家古墳群、久保尻古墳群、久保幸神古墳、公文所古墳がそれぞれ登録されているが、墳丘をとどめているものはほとんどなく、元来の正確な位置も不明である。

当遺跡の西側は低丘陵地帯となり、そのうちの段丘平坦面上に瓦塔を出土した前林廃寺が所在する。しかし、大部分は未調査であり、伽藍の配置などの実態は不明である。また、駒沢川が段丘崖を開削した狭い渓谷には、宮洞窯跡群をはじめとする古代の窯跡が密集する。このうち宮洞 3 号窯は戦後に学術調査がされ、奈良時代の須恵器生産を担った最初期の窯として知られる。

久保尻遺跡・内山遺跡では、国道 151 号及び周辺の店舗等の開発に伴い、両遺跡にまたがる箇所で古墳時代を中心とする集落が調査されている。昭和 42 年の国道 151 号敷設に先立つ調査（A 地点）では、古墳時代中期から後期の建物群が発見され、当遺跡が集落遺跡であることが判明した。隣接地で平成 6 年度に行われた調査（B 地点）では、中世の溝や竪穴等が主体であった。また、平成 8 年度の店舗に伴う調査（C 地点）では、古墳時代中期後半から後期初頭の竪穴建物が把握されている。平成 15 年度に D 地点で実施した試掘調査では縄文時代の竪穴建物が検出された。当遺跡の南側に接する前の原遺跡では、1970 年の飯田高校による調査にはじまり、これまで 4 次にわたる調査が行われ、縄文時代の集落、古墳時代の大型建物、平安時代の集落など多くの成果がある。

これまでの調査成果から、新川右岸の段丘端部付近に縄文～古墳時代及び中世の遺構が集中することが判明している。久保尻遺跡においては国道近辺の内山遺跡との境界付近に古墳時代の集落域が広がる。ただし、国道から離れた遺跡の中央～南側の田畠が広がる地帯は調査がさほど及んでいないため、遺構の分布は十分に判明していない。現在は、すでに把握された内山・久保尻の両遺跡の集落域の広がりや、前の原遺跡との連続性、時代ごとの変遷などが解明されるべき課題といえる。

第4節 調査前の状況

1 調査着手前の地形（第4図、写真図版1・10）

調査地北側はスーパーマーケットの駐車場があり、そこから南側に向かって畑、水田として造成された段が順次下がっていく。畑と水田との間にある段は比高差 1 m ほどで、自然石を積んだ石垣で土留めされていた。段差（石垣）のラインは敷地中央付近でクランク状に方向を変える。その部分で土手がわずかに南側へ張り出し、古墳の墳丘の一部のように見える箇所が認められた。張り出した箇所には、正面に「三界萬靈」と刻まれた長楕円形の自然石の碑が建っていた。

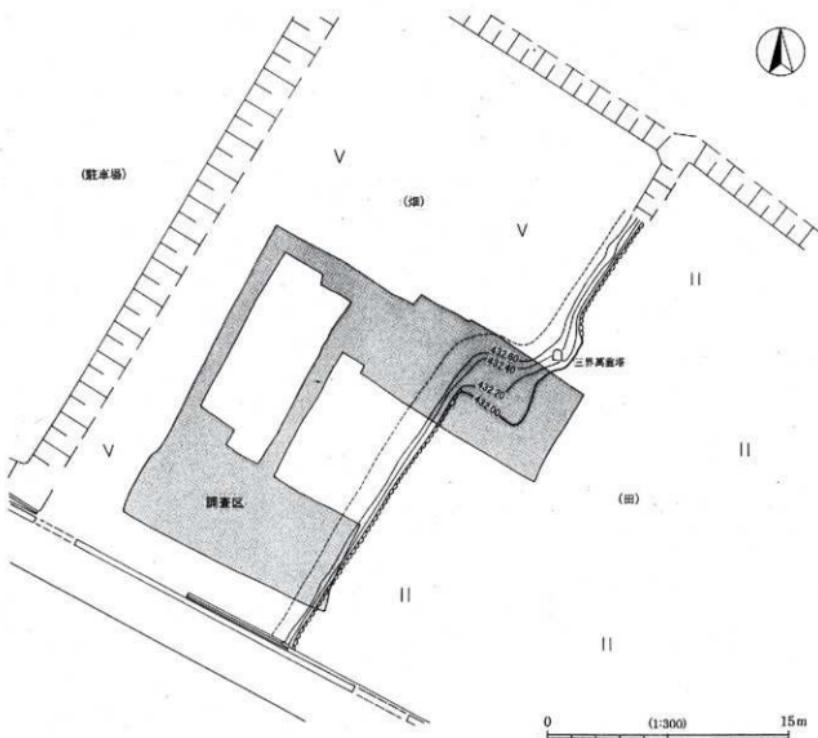
2 田中古墳に関する記録

田中古墳は、『下伊那史』第2巻（下伊那史編纂会 1955）第4章に、次の記載がある。

田中

久保尻平西側古墳群中最北の平坦地にあつた円墳で、水田畦畔の一角に、東西の径一・三米、南北の径三・二米、高〇・九米の三角形に突出した芝生地が残存し、その上に「三界萬靈」の小石碑が西面に立ててある。

この情報をもとに、現在の飯田市埋蔵文化財包蔵地分布地図に消滅古墳として「田中古墳」が登録されている。『下伊那史』の刊行から半世紀以上を経過しているが、調査前においても現地は以上の記載と同様の状況であった。このため、調査対象地に田中古墳が残存するものと想定し、表土掘削の前に地形測量を行った。発掘作業では、田中古墳の墳丘や周溝及びこれに関連する遺構の存在を予測し、慎重に表土掘削と検出を行うこととした。調査結果は第4章で詳述する。



第4図 調査前地形

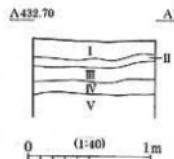
第3章 調査の成果

第1節 基本層序

基本的な層序は、調査区北西壁のA - A'で観察した（第5図）。地表側からI層～V層に分かれ、V層上面が主たる遺構検出面である。I層・II層は新旧の畑作時の耕土、III層がややしまりと粘り気のある旧水田床土である。II層は調査区の一部でみられない箇所がある。IV層以下が近現代の営農以前の堆積層であり、暗褐色を呈する。古墳時代の遺構 SI006 はV層上面から掘り込まれ、奈良時代の遺構 SI005 はIV層上面から構築される。また、調査の中途中で奈良時代の遺構 SI020 は IV層上面から構築されていることが判明したが、表土掘削時にIV層中で遺構を把握することはできず、黄褐色ローム質のV層上面まで剥いだ時点で遺構を検出した。したがって、IV層は奈良時代以前からの堆積層であり、この層の上部は近現代の耕地開発等（I～III層）によってある程度削平を受けているとみられる。地表から遺構検出面（V層上面）までの深さは、50～80cmであった。

【基本層序】

層 No.	土色	土質	粘性 / 粒度	特記事項
I層	10YR4/1 褐灰	SL	無 中	<現耕土> 0.5cm程度の礫を含む
II層	10YR4/4 褐	SCL	無 中	<旧耕土> 0.5cm程度の礫を含む
III層	10YR4/2 褐黄	SL	強 中	<水田床土> 0.5cm程度の礫を含む
IV層	10YR3/3 暗褐	SL	無 中	暗褐色砂壌土 0.5cm程度の礫を含む
V層	10YR6/6 黄褐	SiCL	中 強	ローム質土層 0.5cm程度の礫を含む



第5図 基本層序

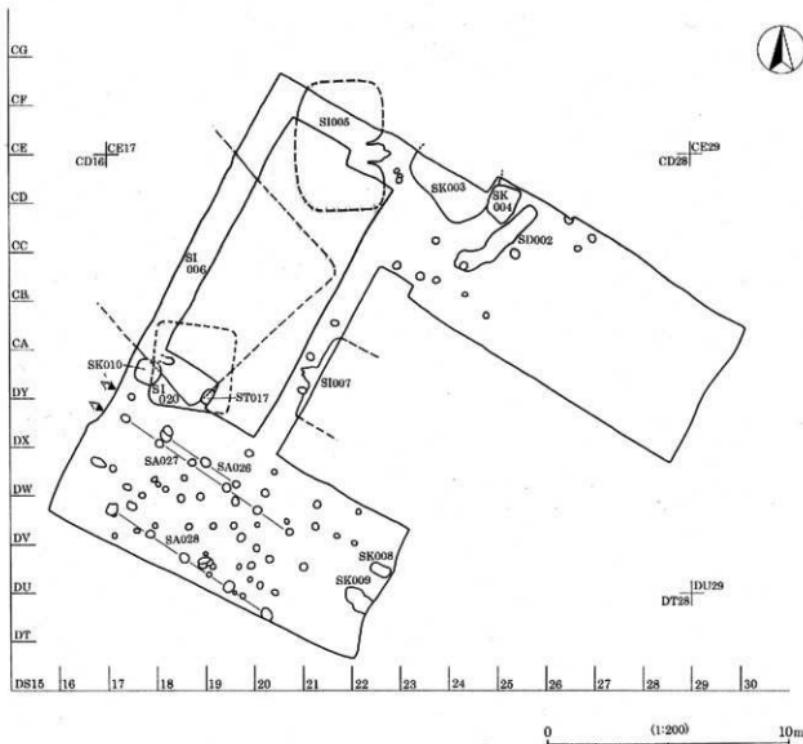
第2節 成果の概要

調査の結果、検出した遺構等は以下のとおりである。（遺構分布図：第6図）

竪穴建物	4棟 (SI005, SI006, SI007, SI020)
土坑	4基 (SK003, SK008, SK009, SK010)
焼成坑	1基 (SK004)
集石墓	1基 (ST017)
溝	1条 (SD002)
柱列	3基 (SA026, SA027, SA028)
小穴（ピット）	66基

竪穴建物4棟のうちSI006は古墳時代、SI005、SI007、SI020は奈良時代である。SI006は、奈良時代のSI020に切られる。土坑SK008、SK009は縄文時代、SK003は古墳時代、SK010は中世に位置づく。ST017は中世墓とみられる。このほか、調査区の全体に小穴が数多く分布しており、一部に柱列とみられる等間隔の小穴の並び (SA026, SA027, SA028) が認められた。

以下、本報告中における古墳時代の土器及び編年観について山下誠一の論考（山下 1999・2004）、律令期土器については恒川遺跡群を基軸とする編年（伊藤 2005）にそれぞれ準拠する。



第6図 遺構分布図

第3節 遺構

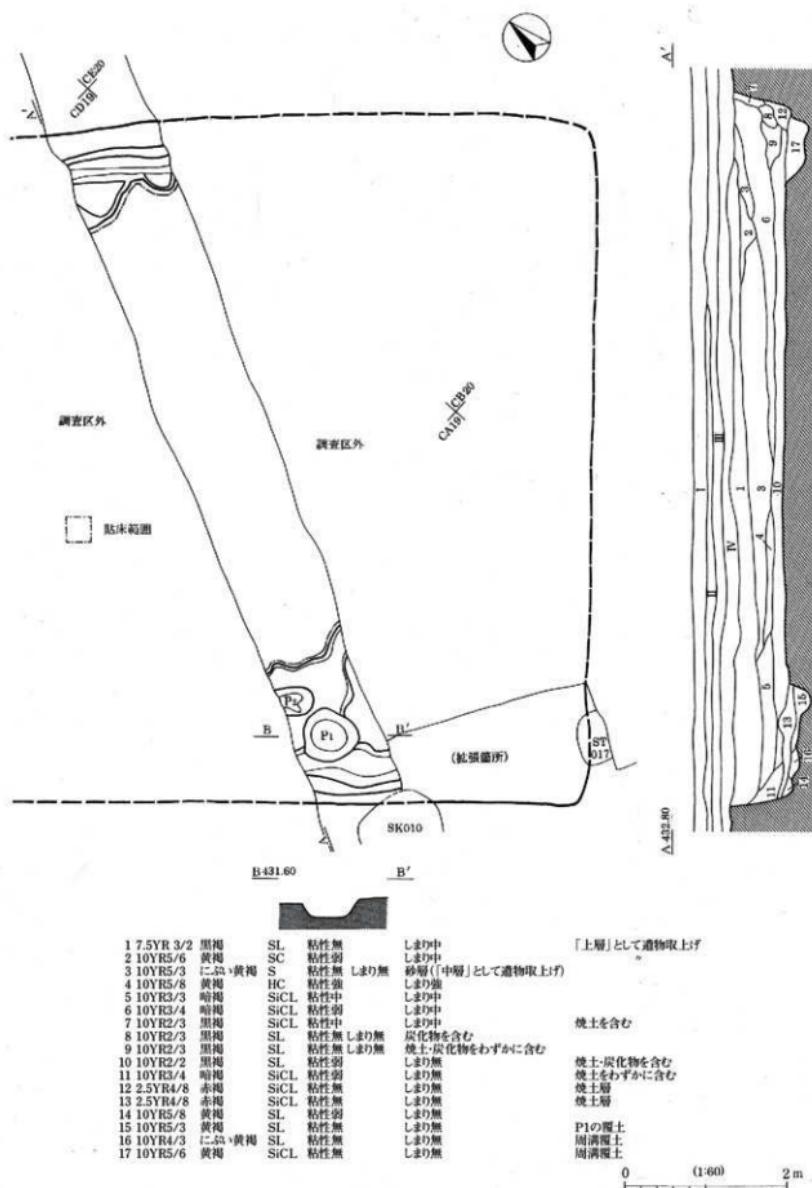
1 竪穴建物

(1) 古墳時代

SI006 (第7・8図、写真図版2・3・4)

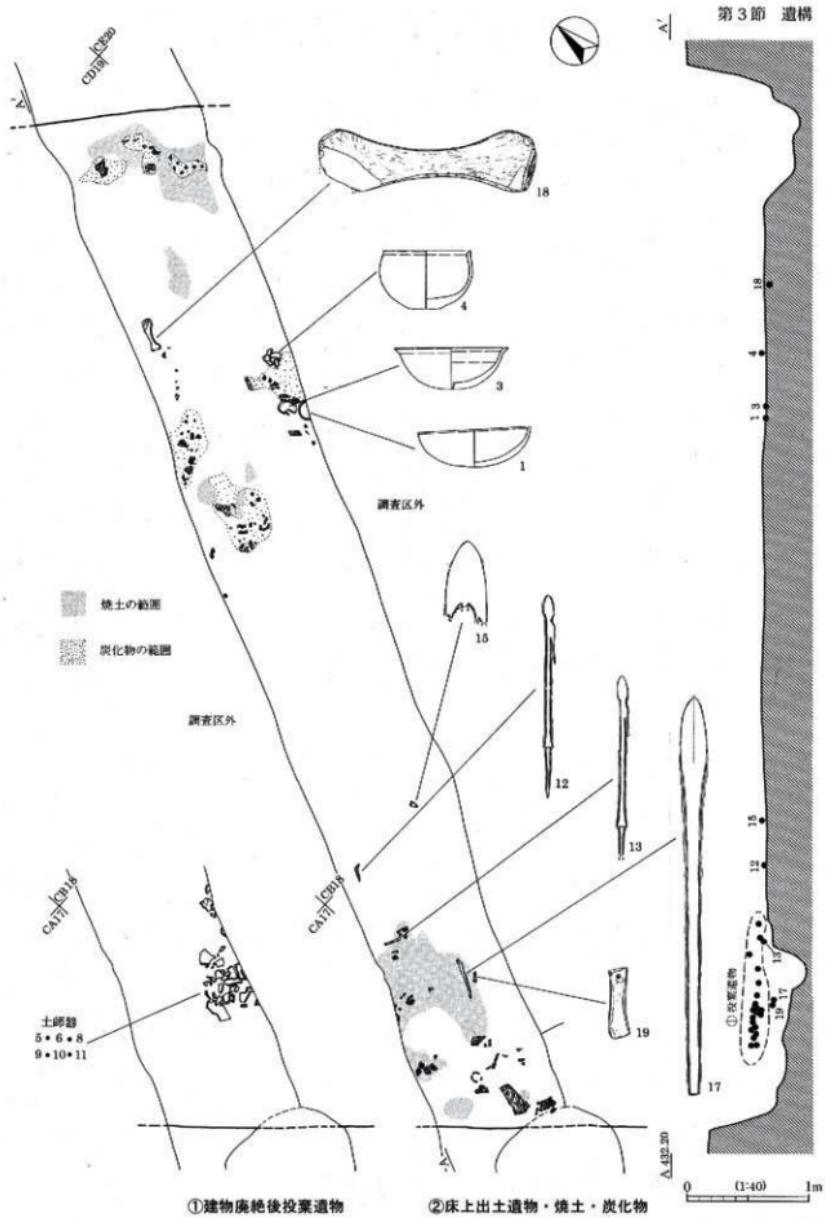
概要: グリッドDY17からDY20にかけて位置する。南壁付近で奈良時代の建物SI020、中世遺構SK010、ST017と重複する。調査が及んだのは北壁から南壁にかけて斜行する範囲にとどまる。調査の途中で南側の一部を遺構検出面まで拡張し、建物の隅の位置を把握した。建物の平面を正方形とした場合の建物規模は1辺約8.4mと推定される。遺構検出面から床面までは約70cm程度を測る。床面や壁面が全体的に火を受けて赤く変色し、炭化物が多量に検出されたことから、焼により廃絶したとみられる。調査範囲内で主柱穴やカマド等は検出しなかった。

埋土: 自然埋没している。3層は他の遺構にはみられない砂質層である。壁際の11～13層や床上の10層は炭化物や焼土を非常に多く含む。遺物は多くが床直上の10層や廃絶直後の堆積層で



第7図 SI006

第3節 遺構



第8図 SI006 遺物等検出状況

ある5層から出土したが、上位の砂層にも遺物が少量流入している。

床・壁：床は全体によく叩き締められ、硬化している。南側の壁寄り付近では貼床は不明瞭となる。壁は周溝から急に立ち上がり、上方でやや緩やかになる。検出面から床までの深さは最も深い箇所で88cmを測る。床面や壁面は、被熱により赤く変色している箇所が多くみられる。

建物内施設：建物内の周溝は壁から10～20cm程の間隔をあけ、30cm前後の幅で外周部に掘り込まれる。南壁側近は貼床が途絶え、建物内小穴（P1）がある。P1の北側に隣接して小穴（P2）が1基あるが、小型で浅く、主柱穴とは考えにくい。

焼土・炭化物：焼土と炭化物は建物の壁際付近で多く検出された。北、南の壁際から1～2m程度の範囲に赤変箇所が比較的多く分布する。炭化物はほとんどが細片であったが、径10cm前後の太い木材が含まれる。これらは南壁際で多く、北壁際では少なかった。

遺物出土状況：南壁付近に多数の土師器片が集中する箇所がある（第8図①）。土器片を包含する5層は床面及び焼土層の上位であり、建物焼失後の堆積層である。大型・小型の甕（8～11）があるほか、杯（5）や高杯（6）も含まれる。建物焼失後間もない段階で一括して投棄された遺物とみられる。床面直上の遺物（第8図②）は、建物南壁側寄りで鉄器類が多く出土した。鉄鎌（12～16）は床上に束ねられることなく散在していた。鉄鏟（17）と小型の砥石（19）は南壁付近に並ぶ。北壁寄りの箇所では土師器の杯（1～4）がまとまって出土し、付近に大型の砥石（18）が置かれる。ほかに建物内土坑P1出土の須恵器破片（7）がある。

時期：出土遺物から、古墳時代中期中葉に比定される。

(2) 奈良時代

S1005（第9図、写真図版5）

概観：グリッドCE22に位置し、主軸はN 2°Eを向く。東壁から西壁側のカマド周辺、北西隅付近を調査した。北西隅を把握したことにより、建物の平面形状は隅丸長方形に復元できる。主軸長は3.5mを測り、長軸長は復元すると約6.8m程度となる。柱穴は検出されなかった。

埋土：自然埋没している。

床・壁：埋土最下層の8層はしまりがなく、貼床は認められなかった。東壁はカマドの袖部分でやや緩やかに立ち上がる。西壁は不明瞭であったため床面付近まで掘り下げ、断面の観察により壁の立ち上がりを把握した。検出面から床まで約20cmを測る。

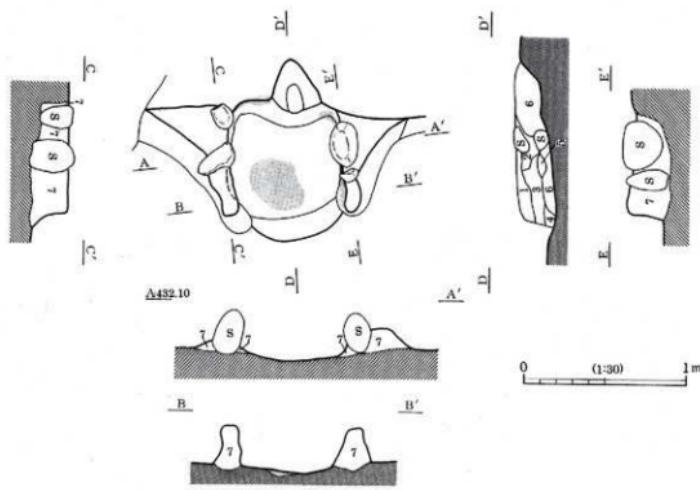
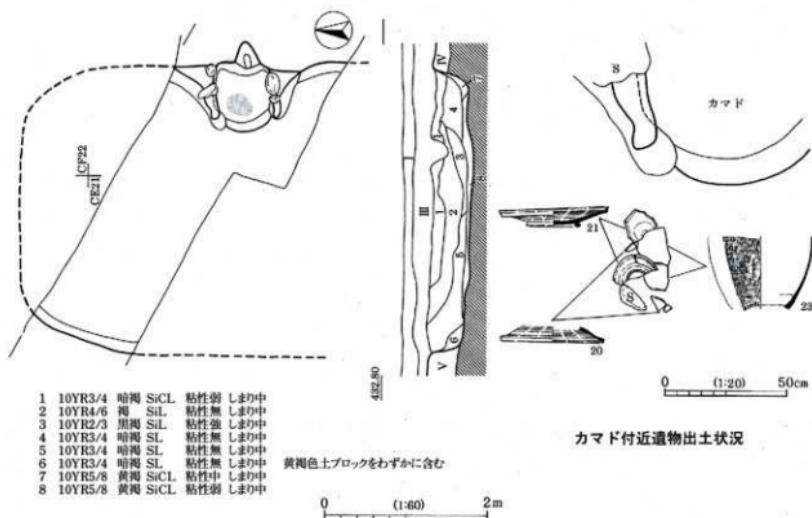
カマド：東壁に付設された石芯粘土カマドである。焚口から奥壁まで70cm、袖を含めた幅は126cmを測る。煙道は残存長30cm、幅は29cm。芯材の石は概ね20cm大の自然石を用いる。焚口から奥壁にかけてわずかに掘りくぼめられ、カマド内部全体が被熱している。埋土中に構築材とみられる黄褐色ブロックを含む。支脚の痕跡はない。

遺物出土状況：カマド焚口手前に須恵器が集中する。大甕の底部付近から体部にかけての破片（23）が床上に敷かれ、その上に盤（21）が伏せ置かれる。甕の破片は一個体のうちの一部のみであり、盤を置くために平らな破片を使用したと考えられる。盤と組み合うとみられる蓋（20）の破片も共伴する。これらは建物廃絶にともなう儀礼の可能性がある。他に鉢（22）がカマド左袖付近から、土師器甕片（24・25）、刀子（26）がカマド内部より出土した。

時期：出土遺物から、奈良時代中葉に相当する。

S1007（第10図、写真図版6）

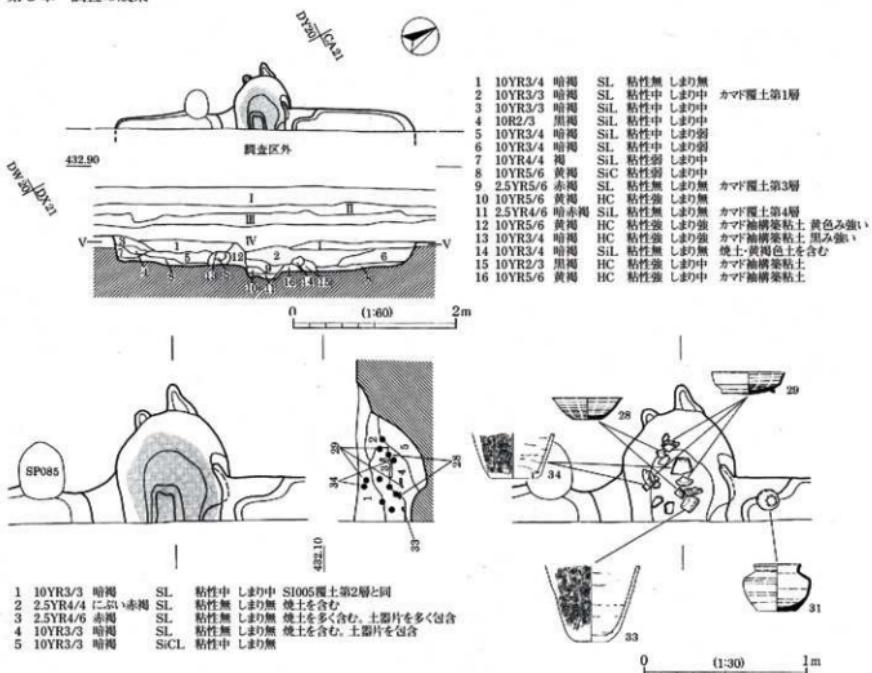
概観：グリッドDW20～CA21に位置し、主軸はN 63°Wを向く。西壁の端から30cm程度内側



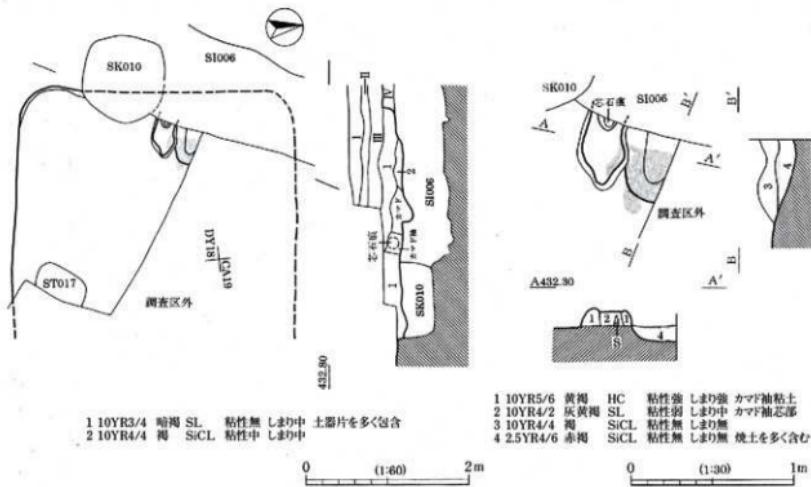
- 黄褐色土ブロックを含む
黄褐色土ブロックを含む
黄褐色土ブロックを含む
燒土を含む
燒土を含む
燒土を含む
燒土を含む
燒土を含む。土器片を含む
カマド構築粘土。基本層IV層に近い。

第9図 SI005

第3章 調査の成果



第10図 SI007



第11図 SI002

に調査が及んだにすぎず、大半は調査区外である。西壁の延長は3.7mを測る。

埋土：自然埋没している。

床・壁：床面の硬化は認められなかった。壁は床からやや急に立ち上がる。

カマド：石芯粘土カマドである。掛口付近から煙道の一部までを調査した。カマド底部は建物床面より約20cm深く掘り込まれる。底部には地山の掘り残しが突出する箇所がある。右袖はほぼ完全に破壊されていたが、左袖は比較的残りが良く、芯石の痕跡が認められた。

遺物出土状況：カマド右袖付近に須恵器広口壺（31）が置かれる。カマド内部からは土師器甕や須恵器の食器類が打ち割られ、焼土とともに検出した。須恵器に被熱した痕跡はなく、埋土中に分散することから、カマド廃絶時に破碎して投入されたとみられる。他に刀子（35）がカマド内から出土した。

時期：出土遺物の一部は奈良時代後葉に位置づくが、全体として奈良時代中葉とみる。

SI020（第11図、写真図版7）

概観：グリッドDY18に位置する。主軸はN 85°Wを向く。床面は遺構検出面（基本層序V層上面）とほぼ同レベルであったため、壁より上部を表土掘削時に検出できなかった。加えて、SI006と重複する建物北隅付近とカマドの一部は重機等の掘削により消失した。その後、SI006の範囲を把握するため調査区を拡張したところ、奈良時代の遺物が出土した。改めて精査した結果、床面が検出されたことにより、当建物の存在を把握した。基本層序IV層からSI006の上層にかけて掘り込んでいる。平面形は隅丸正方形ないし長方形とみられるが、建物南側が調査区外となり、主軸長は不明。建物北辺は3.4mを測る。調査範囲内で柱穴は検出されなかった。南東隅周辺を除き、建物範囲のほとんどが古墳時代の建物SI006と重複し、土坑SK010に一部を切られる。

埋土：自然埋没している。

床・壁：床面はわずかに縮まる程度で不明瞭だが、暗灰色の粘土が斑状に含まれるため把握できた。壁の立ち上がりは垂直に近い。

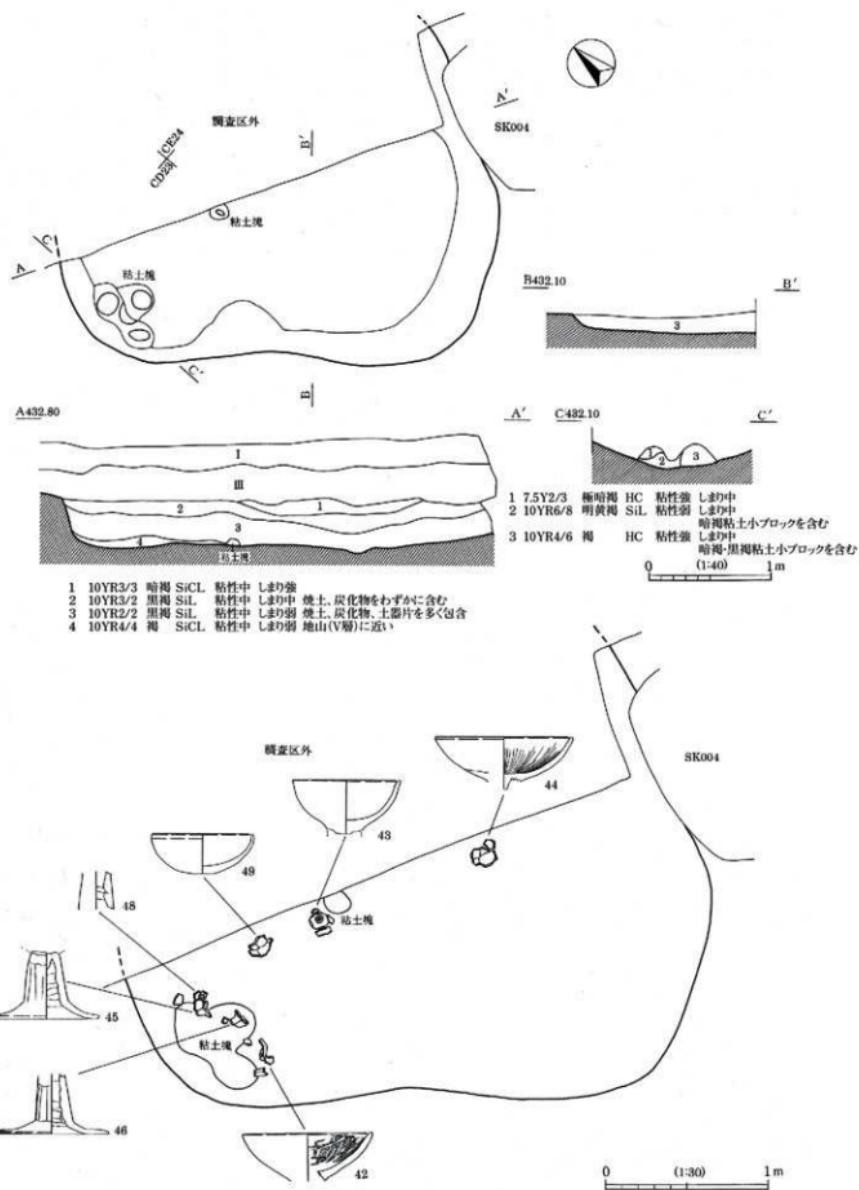
カマド：石芯粘土カマドである。焚口付近と南側の袖の一部を検出した。芯に石を据えて粘土で周囲を固め、さらにその上から土質が異なる外面用の粘土で覆って構築している。遺物出土状況：カマド焚口付近から土師器の長胴甕（39）が出土した。その他、埋土中から土師器甕が数個体分（40・41）出土したが、破片を含めてすべてナデ甕である。須恵器有台杯・蓋（36～38）等が出土。

時期：出土遺物から奈良時代中葉に相当する。

2 土坑・焼成坑

SK003（第12図、写真図版8）グリッドCD24に位置する。北側半分程度は調査区外となるが、平面形状は梢円形と推定される。長軸方向はN 40°W。長径は3.6m以上、短径は2.8m以上の規模をもつ。東側のごく一部が焼成坑SK004に切られる。遺構の端部から底部にかけて緩やかに掘り込まれており、側壁、柱穴はない。埋土の3層は土器片と焼土、炭化物を多く含む。北側寄りの底面に粘土塊が分布し、土師器の高杯・杯（42～50）がこれらに接する形で出土した。埋土の掘削中に土師器片が多く出土し、高杯が大半を占める。時期は出土土器より、古墳時代中期中葉に比定される。

当初、焼成坑SK004の灰原的な性格を考えたが、切り合いを精査し、本遺構の埋土がSK004によって切られ、被熱していることを確認した。したがって、SK004とは明確な時期差があり、両遺構に直接的な関係はないと思われる。性格については、粘土塊を原材料とみれば土器製作等の工



第12図 SK003

房を考えることもできるが、柱穴や壁がなく、竪穴建物とは考えがたい。また、粘土塊は遺構底面に直接盛りつけるような形で構築され、その上に土師器が据え置かれるような状態で集中していたことから、土器製作の原材料というより、土器を置くための土壤のような目的を推定する。また、隣接する古墳時代の竪穴建物SI006と同時期であり、何らかの関連が考えられる。

SK004（第13図、写真図版7）グリッドCD25に位置する焼成坑である。古墳時代の土坑SK003の西側の一部を切る。平面形は長い台形状の不整四角形を呈し、長軸長150cm、最大幅115cmを測る。長軸はN 40°Wを向く。埋土は2層に分かれると、1層の大半は重機掘削時に失われ、遺構検出面から底部まで5～10cm程度が残存するのみであった。底面は概ね平滑で、壁は底部から角をつけるようにして急に立ち上がる。底部中央寄りから奥壁（北側）にかけて被熱する。強く被熱しオレンジ色に赤変・硬化する箇所と、その周囲が明赤色に弱く被熱した箇所に分かれ。被熱部の厚さは2～3cm程度である。前壁（南側）付近に被熱はみられない。また、遺構中央付近は被熱が弱い箇所があり、平面ドーナツ状に被熱部が分布する。奥壁付近には炭化物がわずかに残る。以上から、本遺構で何らかの焼成行為が直接行われたのは疑いないが、遺物は被熱した須恵器甕胴部の小片1点が出土したにすぎず、時期も不明である。

SK008（第13図）グリッドDU22に位置する。東西方向に長い不整長楕円形を呈する。長軸長82cm、短軸長43cm。断面形は舟底状である。出土遺物はない。SK009と並ぶことから縄文時代の土坑と考えられる。

SK009（第13図）グリッドDT22に位置する。SK008に隣接して並ぶ。東側の一部は調査区外となるが、平面形は東西方向に長く、瓢形にくびれる。短軸長72cmを測る。断面形は舟底状である。出土した土器の底部（52）から、時期は縄文時代後期とみられる。

SK010（第13図）グリッドDY17に位置する。SI006、SI020を切る。平面不整隅丸方形で、規模は97cm～103cmを測る。断面は箱状を呈する。柱等を据えた痕跡は認められず、自然に埋没している。出土遺物はなく、時期や性格は不明だが、他遺構との切り合いや埋土の特徴から、中世の土坑と考えられる。

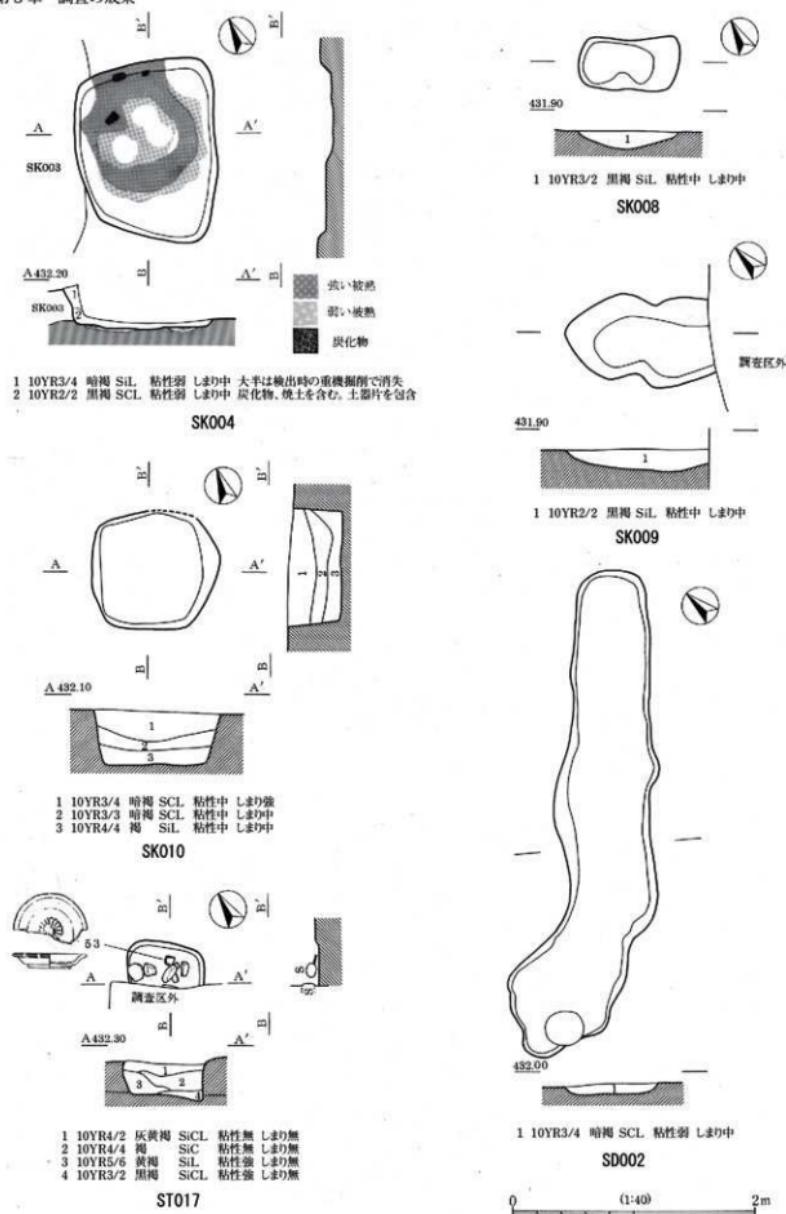
3 集石墓

ST017（第13図、写真図版9）グリッドDY19に位置する。集石を伴う土坑である。SI006の範囲を確認するために調査区を拡張したところ新たに検出した。SI006の壁際を切る。東側の約1/3は調査区外となるが、平面円形は円もしくは楕円形の土坑と思われる。底部に拳大の自然石を配置する。焼土、生骨、焼骨等は検出されなかったものの、規模や形状から集石墓と判断した。瀬戸・美濃系の端反皿（53）が1点出土した。時期は遺物から15世紀末から16世紀初頭とみられる。

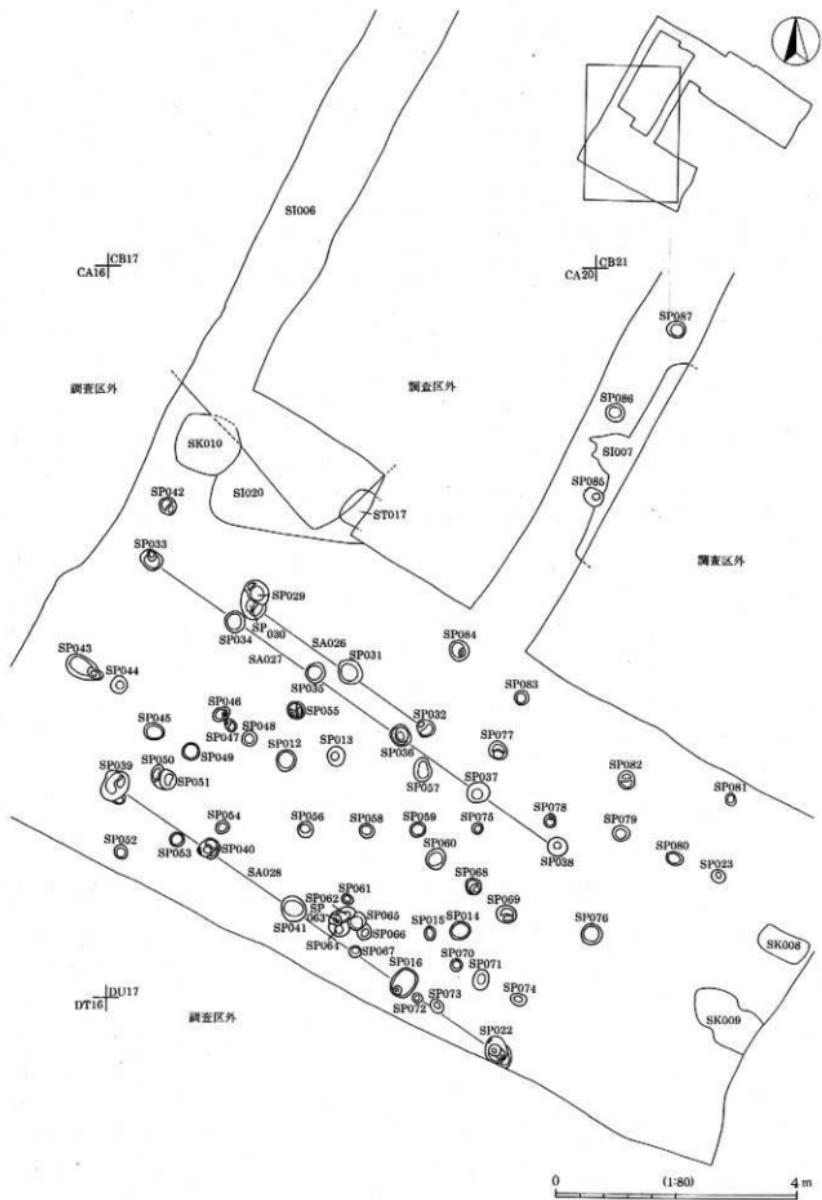
4 溝

SD002（第13図）グリッドCC25を中心に位置する。長さ400cm、最大幅80cm。遺構端部から底部にかけて緩やかに掘り込まれる。検出面からの深さは5cm前後と浅い。出土遺物はなく時期・性格は不明だが、中世の小穴に切られるため、古代以前と考えられる。

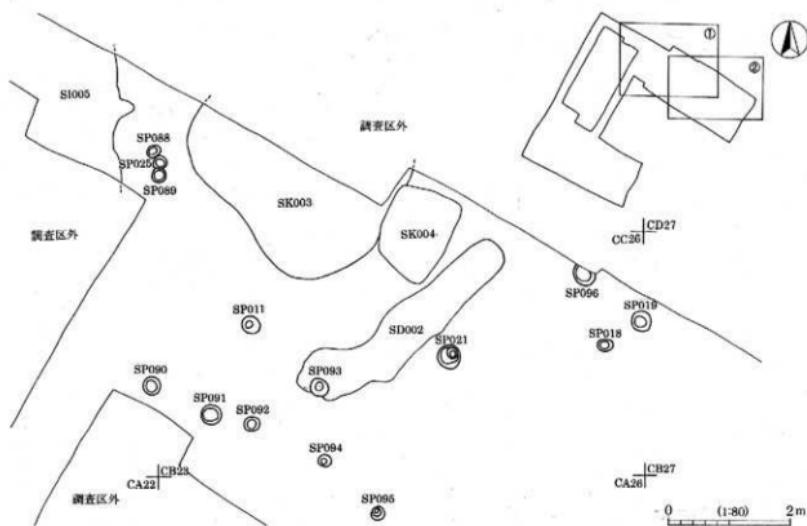
第3章 調査の成果



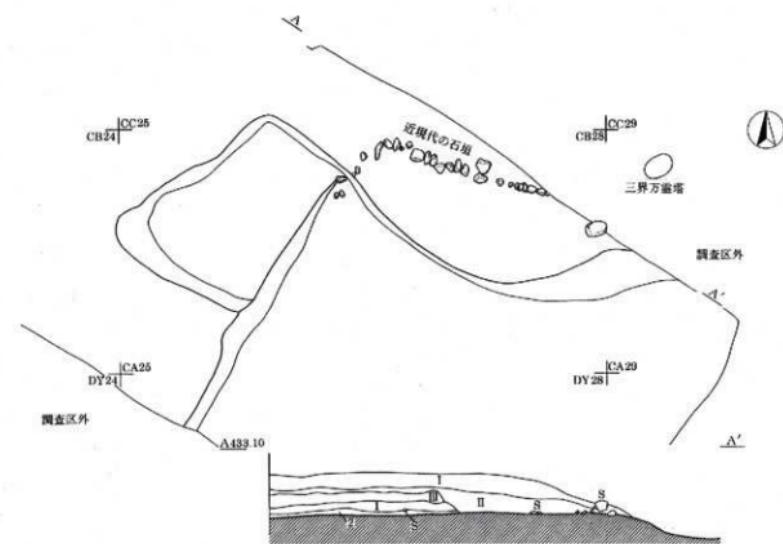
第13図 SK004・009・010・ST017・SD002



第14図 小穴分布図(1)



第15図 小穴分布図(2)



第16図 田中古墳付近

5 柱列・小穴（第14・15図、第3表、写真図版9）

小穴が調査区の全体に分布する。個々の計測値は本文末尾の表3に示した。これらは掘立柱建物を構成するとみられるが、総じて柱の通りが悪く、建物として認識できるものはなかった。そのなかで、等間隔かつ直線的に並ぶ小穴群を柱列として認識した。柱列はSA025～027の3基あり、いずれもN 55°Wを向く。柱穴の心々間距離は1.6m～1.9m程度を測る。その他検出した小穴には、奈良時代の遺構SI007を切るもの(SPO85)があり、中世の遺構群と考えられる。一方、グリッドCC27に位置するSPO18からは古墳時代の土師器杯(51)の完形品が出土している。

6 田中古墳付近（第16図、写真図版10）

第2章で述べたとおり、当古墳とされる付近には三界萬靈塔が立ち、墳丘の一部の可能性がある張り出しが存在し、石積で土留めがされていた。張り出しの中心付近を計画建物基礎が横断するため、検出を慎重に実施したものの、古墳に関連する遺構・遺物は検出されなかった。また、調査区の壁の断面を観察したが、土層堆積は基本的な層序を示し、古墳に関連すると思われる遺構や盛土の痕跡等は何ら認められなかった。なお、三界萬靈塔は工事中に移転され、事務所敷地内の駐車場脇に残されている。

第4節 遺物

1 壺穴建物の出土遺物

SI006（第17・18・19図、写真図版11・12）

(1) 建物廃絶後投棄遺物

6、8～11は建物廃絶後に壁際から投棄された土師器である。8・9の壺の内外面はナデ調整され、胴部下半を中心で煤が付着する。壺の胴部は球形だが長脛化傾向が認められ、古墳時代中期中葉から後葉に比定され、床上出土遺物と大きな年代差は認められない。

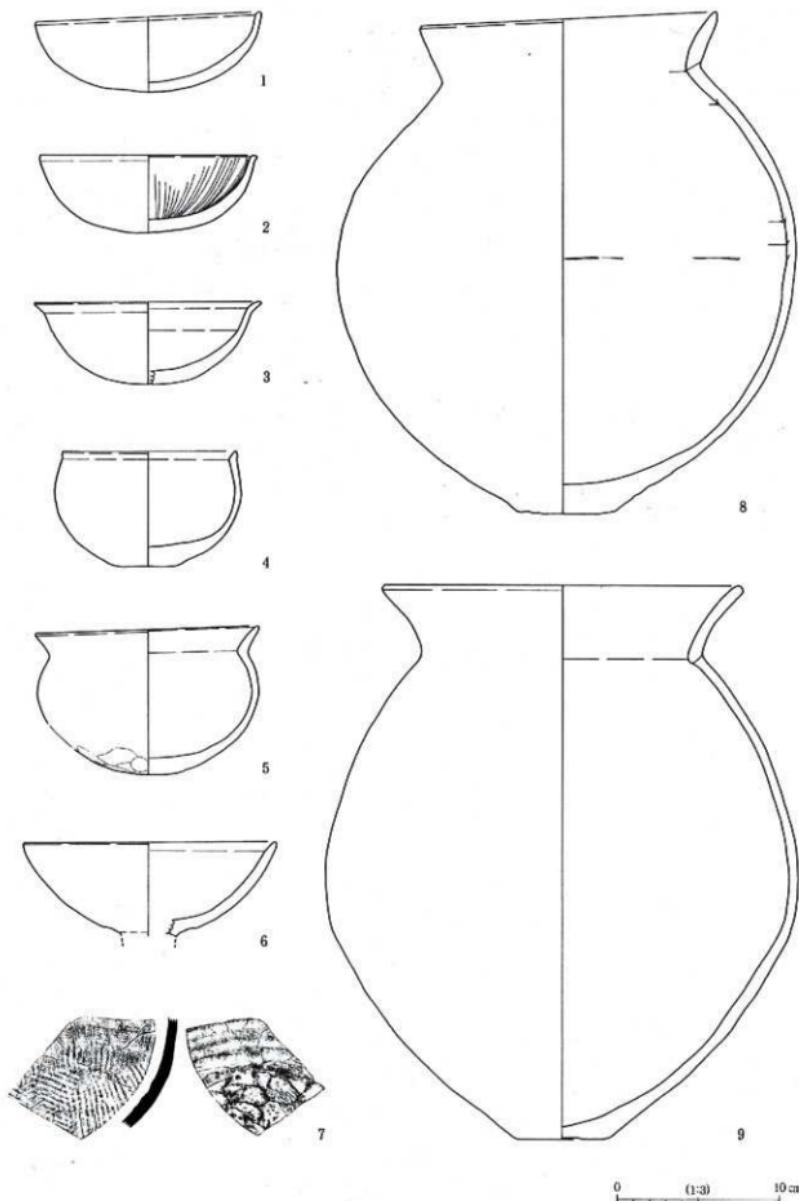
(2) 床面直上出土遺物

土器 1～5は土師器の杯、6は脚部を欠く高杯である。すべて床上から出土している。杯の形態はさまざまであり、口縁端部が丸く整うもの(1)、口縁端部がわずかに外へ折れるもの(2)、大きく外反するもの(3)、体部が球形に近く口縁部の反りが小さいもの(4)、同様で反りが大きいもの(5)がある。摩滅で不明瞭なものもあるが、概ね外面はケズリが入念に施され、内面は程度の差はあれミガキもしくはケズリで整えられる。

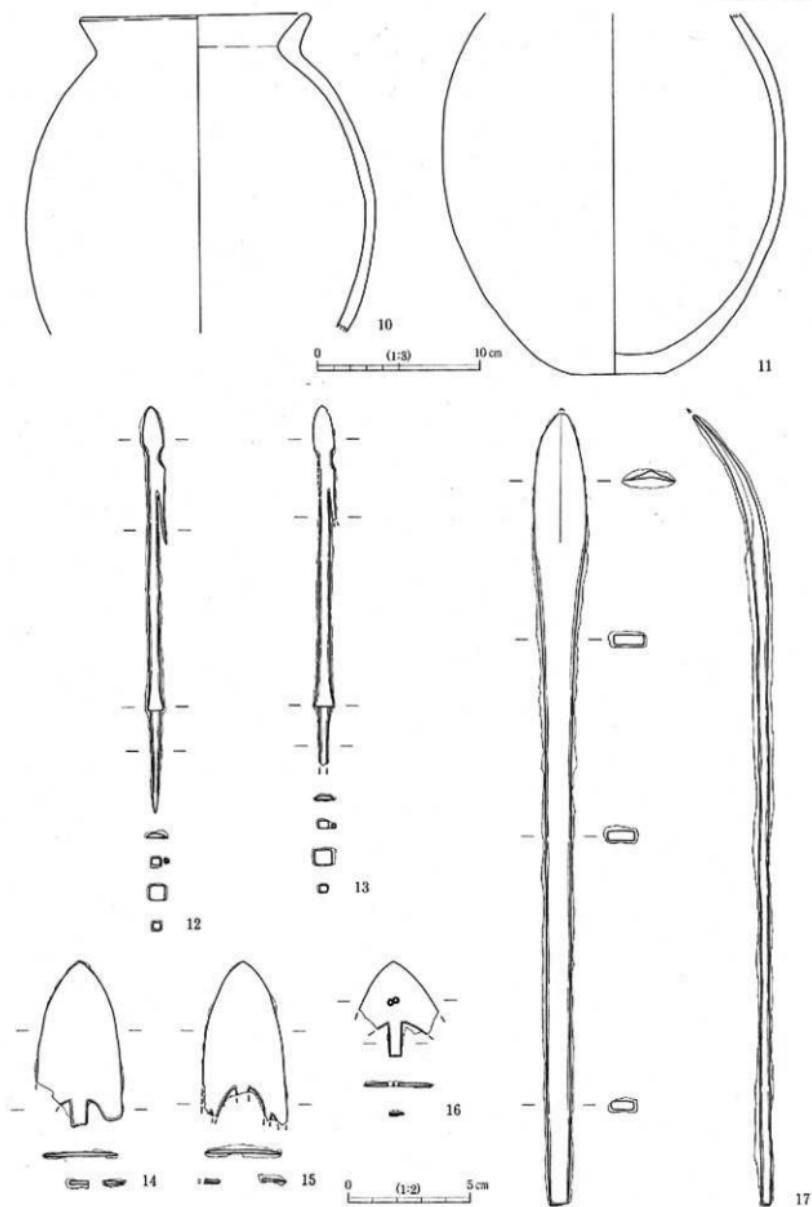
鉄鎌 床上より5点が出土した。各部位の法量は第1表に示した。12・13は長頸鎌、14～16は平根鎌である。すべて床面直上より出土した。有機質は残存しない。12・13は別造りの片脇抉をもつ長頸柳葉鎌で、鎌身闊はナデ闊、茎部闊は台形を呈する。片脇抉は先端にむかうにつれて細く針状となり、外反する。鎌身闊下部で頸部に鍛接される。14・15は短茎長三角形鎌。14は脇抉の端部が丸く成形される。15は欠損と銹化によりやや不明瞭だが、X線写真で重抉が確認できる。16は短茎三角形鎌で、鎌身中央に2孔が近接して穿たれる。

鉄鎔 17は大型の鉄鎔である。先端をわずかに欠損し、復元全長は32.6cm、刃部の最大幅2.1cmを測る。闊は明確に作出せず、刃部全体は柳葉状を呈する。茎部に有機質は残らない。

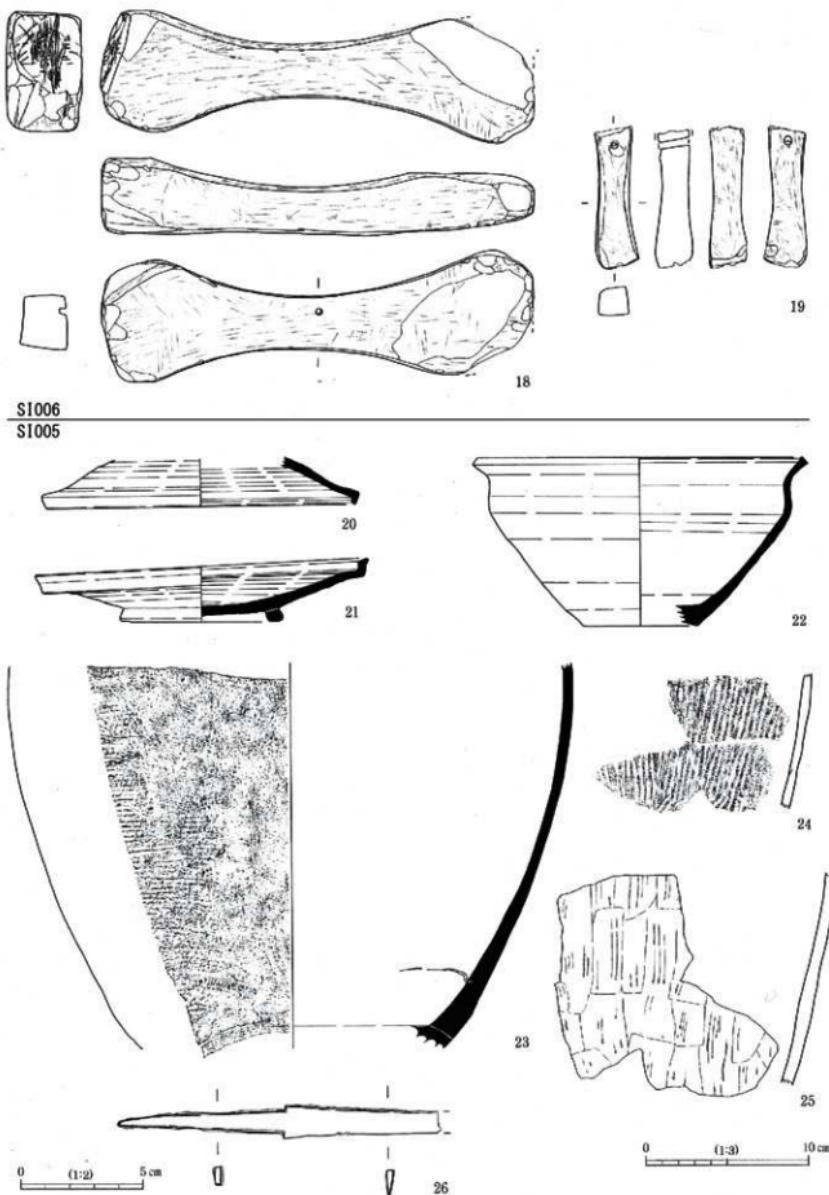
砥石 2点出土した。18は長さ26.0cm、最大幅8.0cmを測る大型品で、4面からの使用により中央部が大きく摩滅してくぼんでいる。石材はきめ細かい赤褐色の粘板岩質である。使用面のうち、



第17図 SI006出土遺物(1)



第18図 SI006出土遺物(2)



第19図 SI006出土遺物(3)・SI005出土遺物

No.	形式	計測値(cm)									
		全長	縦身長	頭部長	茎部長	縦身幅	頭部幅	茎部幅	縦身厚	頭部厚	茎部厚
12	長頭柳葉(独立片逆刺)	16.5	1.6	10.7	4.2	0.8	0.7	0.4	0.2	0.6	0.4
13	長頭柳葉(独立片逆刺)	(12.3)	1.7	10.6	(2.4)	0.8	0.7	0.4	0.2	0.6	0.4
14	短茎長三角形	6.8	6.4	—	1.1	(3.5)	—	0.6	0.15	—	0.15
15	短茎長三角形	(6.7)	(6.7)	—	(0.3)	(6.7)	—	(0.5)	0.15	—	0.1
16	短茎三角形	3.9	(2.9)	—	1.4	(3.3)	—	0.5	0.1	—	0.1

※()内の値は既存値

第1表 SI006 出土鉄鐵計測表

最もくぼみが浅い1面の中央部付近に直径2.5mm程度の用途不明の円孔が表面から3mm程掘り込まれている。19は長さ8.6cm、幅2.7cmを測る小型品で、石材は明灰褐色の安山岩質。上端付近の1箇所に穿孔されており、いわゆる提砥である。4面が使用により摩滅する。

(3) その他遺物

7は建物内土坑P1から出土した須恵器の破片である。器種は特定できないが甌あるいは瓶類の可能性がある。外面にタタキが施され、内面には半月状の当て具痕が多数残る。

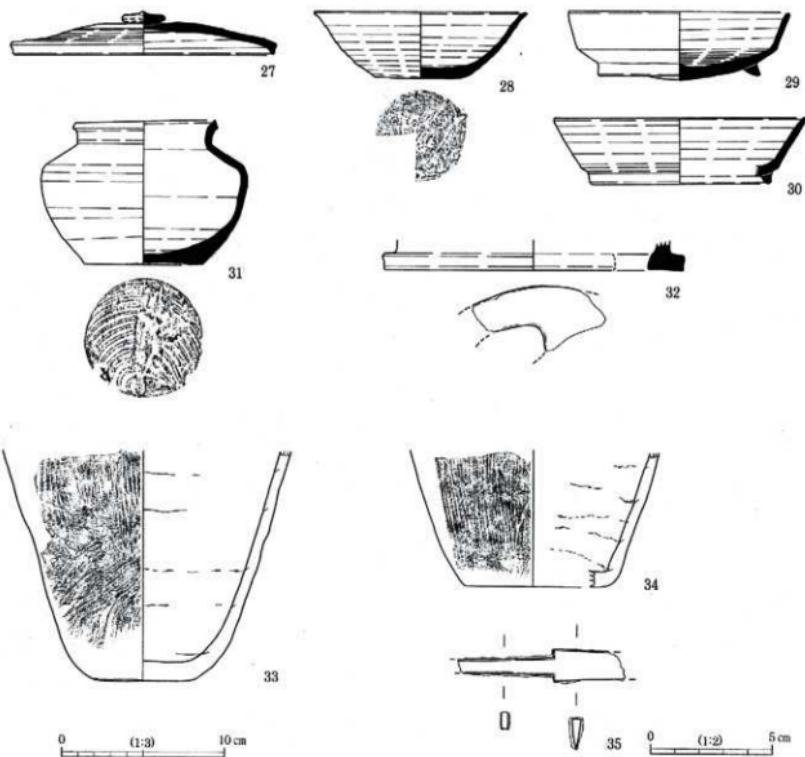
SI005(第19図、写真図版13) 21の盤は器高が低く皿に高台が付いたような器種で、口縁部からほぼ垂直に体部が落ち、強く屈折して底部へ至る。口縁端部は外へ折り返される。20は蓋の破片で、盤と組み合うとみられる。24、25の土師器長胴甌はカマド内より出土した。22は鉢で、口縁部は外反させ、端部を平らに仕上げる。23は須恵器甌の底部から胴部にかけての破片で、胎土にマーブル状の白色土が含まれる。24は外面がハケ調整、25は縦方向のケズリが全面に施される。同じくカマド内部から出土した26の刀子は残存長3.2cmで、両側に直角の闊を造り出す。切先付近を欠損する。

SI007(第20図、写真図版14) 27～30は須恵器の杯・蓋である。28の無台杯は底部切り離し後未調整で、体部はクロロ痕が目立つ。29の有台杯はハの字状の高台が付くが、底部中央が下に突き出たため、据えた際に安定しない。この2点は胎土がきめ細かく精良で、焼成も非常に良い。31は須恵器の広口壺で、肩が緩く折れ、口縁端部は外反する。底部切離しは回転糸切による。32は須恵器甌の底部片である。胎土は白色度が高く軟質である。底部は逆T字状となる。この形態の甌は長野県のほかに岐阜県、富山県など中部山間地や北陸を中心に分布し、底部は蒸気孔を穿たない「つつぬけ」タイプが多いとされる(杉井1999)が、本例は梢円形の蒸気孔である。35の刀子はカマド内より出土した。残存長6.8cmで両側に直角闊をもつ。刃部の途中で折損する。

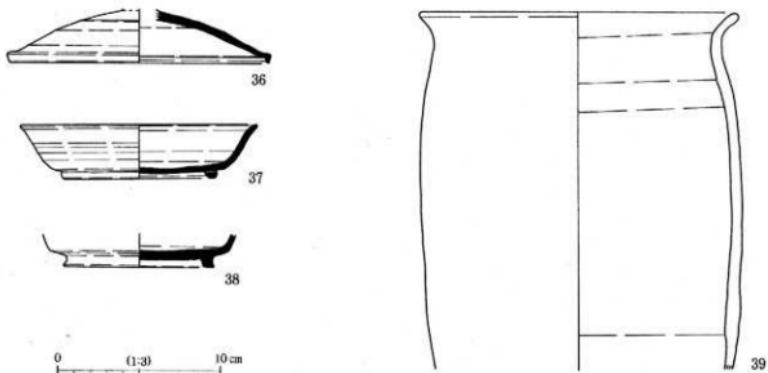
SI020(第20・21図、写真図版14) 36～38は須恵器の杯・蓋である。有台杯はいずれも回転糸切りによる底部切離しである。39～41は長胴甌で、いずれも外面にナデ調整が入念にされている。41の胎土は雲母を含み、きめ細かく精良である。なお、ハケ調整の甌は出土していない。

2 土坑の出土遺物

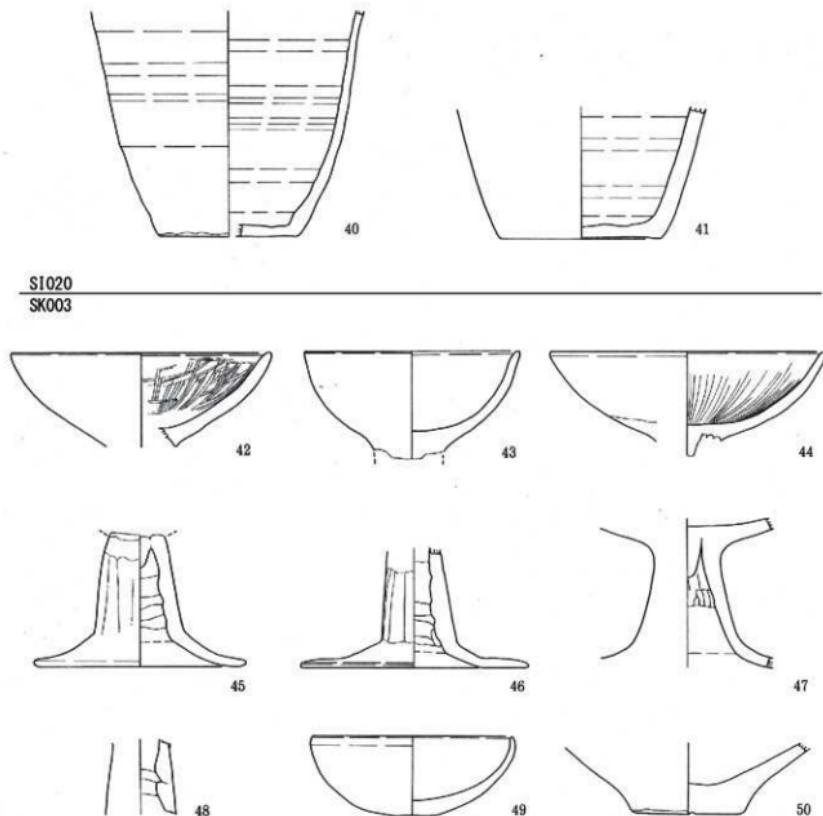
SK003(第21図、写真図版14) 42～48は、土師器の高杯である。杯身部は端部が丸く整い、体部に屈曲はなく、緩やかに湾曲して底部へ至る。内面に磨きが施されることが多い。脚部は粘土紐巻き上げにより製作され、いずれも脚部全体の下から1/4程のあたりで強く屈曲する。杯身部と脚部の接合部に円錐形の粘土部材を別に作り充填することを特徴とする。49は杯、50は甌の底部である。当遺構の遺物の時期は古墳時代中期中葉に比定される。



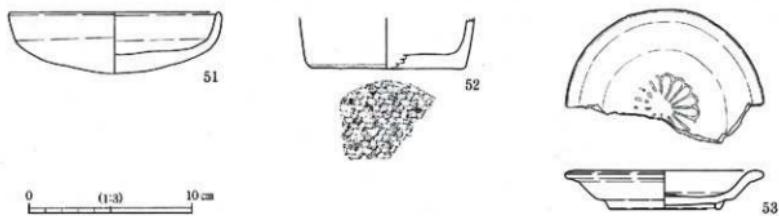
SI007
SI020



第20図 SI007出土遺物・SI020出土遺物(1)



その他遺構



第21図 SI020出土遺物(2)・SK003出土遺物・その他出土遺物

3 その他の遺物（第21図、写真図版14）

51はSP018から出土した土師器杯である。須恵器の杯蓋を模倣した製品の可能性があり、時期は古墳時代中期末～後期初頭とみられる。52はSK009出土の縄文土器の底部である。底面は網代の痕がつき、薄い器壁がほぼ垂直に立ち上がる。後期前葉の堀之内～加曾利B式段階に相当する。53はST017出土の瀬戸・美濃系の端反皿で、灰釉を全面に施す。底部内面中央に菊花の印花文が認められる。大窯1期（藤澤2002）に位置づけられ、15世紀末～16世紀前半に比定される。なお、図化はしていないが、V層上面検出中に天目碗の小破片等の中世遺物がわずかに出土している。

遺構	図版 No.	器種	法量(cm)			焼成	胎土	備考
			口径	底部径	器高			
SI005	20	須恵器 蓋	19.0	—	—	良	0.1～0.3cm白色粒多く、黒色微粒わずかに含む。	
〃	21	須恵器 蓋	20.2	10.0	3.9	不良	0.1～1.0cm白色粒多く、黒色微粒わずかに含む。	
〃	22	須恵器 鉢	20.0	7.0	10.3	不良	0.1～0.3cm白色粒多く、黒色微粒わずかに含む。	底部静止系?
〃	23	須恵器 壺	—	—	—	良		
SI006	1	土師器 杯	13.7	—	4.9	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	
〃	2	土師器 杯	13.0	—	5.2	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	
〃	3	土師器 杯	13.8	—	5.1	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	
〃	4	土師器 杯	(10.6)	—	7.2	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	
〃	5	土師器 杯	—	—	—	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	
〃	6	土師器 高杯	15.4	—	—	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	
〃	7	須恵器 壺?	—	—	—	良	黒色微粒わずかに含む。	(外)タタキ(内)当真宿
〃	8	土師器 壺	18.1	6.3	30.7	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	
〃	9	土師器 壺	21.8	5.1	33.9	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	
〃	10	土師器 壺	13.9	—	—	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	
〃	11	土師器 壺	—	5.5	—	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	
SI007	27	須恵器 蓋	15.8	—	2.7	良	0.1～0.3cm白色粒多く、黒色微粒わずかに含む。	
〃	28	須恵器 無台杯	12.7	—	4.1	良	0.1cm以下白色粒わずかに含む。	底部切離し後未調整
〃	29	須恵器 有台杯	13.4	9.8	4.2	良	0.1cm以下白色粒わずかに含む。	底部回転ヘラケズリ
〃	30	須恵器 有台杯	(15.4)	10.8	4.0	良	0.1～0.3cm白色粒多く、黒色微粒わずかに含む。	底部回転ヘラケズリ
〃	31	須恵器 短頸壺	8.6	7.3	8.8	良	0.1～0.3cm白色粒・黒色微粒共に多く含む。	底部回転丸切
〃	32	須恵器 壺	—	—	—	不良	0.1～0.2cm白色粒わずかに含む。	蒸気孔あり
〃	33	土師器 長胴甕	—	(5.9)	—	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	(外)タテケ
〃	34	土師器 長胴甕	—	(8.5)	—	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	(外)タテケズリ
SI020	36	須恵器 蓋	(15.8)	—	—	良	0.1～0.3cm白色粒・黒色微粒共にわずかに含む。	
〃	37	須恵器 有台杯	(14.4)	(9.2)	3.4	良	0.1～0.5cm白色粒多く、黒色微粒わずかに含む。	
〃	38	須恵器 有台杯	—	9.1	—	良	0.1～0.2cm白色粒多く、黒色微粒わずかに含む。	
〃	39	土師器 長胴甕	19.1	—	—	良	雲母微粒を含む	
〃	40	土師器 長胴甕	—	(8.4)	—	良	雲母微粒を含む	
〃	41	土師器 長胴甕	—	(9.7)	—	良	雲母微粒を含む	
SK003	42	土師器 高杯	(15.7)	—	—	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	坏部
〃	43	土師器 高杯	13.1	—	—	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	坏部
〃	44	土師器 高杯	(16.7)	—	—	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	坏部
〃	45	土師器 高杯	—	(12.3)	—	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	脚部
〃	46	土師器 高杯	—	(13.3)	—	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	脚部
〃	47	土師器 高杯	—	—	—	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	脚部
〃	48	土師器 高杯	—	—	—	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	脚部
〃	49	土師器 高杯	(12.2)	—	4.9	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	脚部
〃	50	土師器 高杯	—	6.0	—	良	0.1～0.3cm白色粒多く含む。	
SP018	51	土師器 杯	12.7	—	3.7	良	0.1～0.3cm白色粒含む。	
SK009	52	縄文土器 深鉢	—	(9.3)	—	良		底部
ST017	53	瀬戸美濃 端反皿	10.9	6.7	2.4	良		全面施釉。菊印花。

第2表 出土土器観察表

遺構No.	位置 (グリッド)	長径 (cm)	検出面からの 深さ (cm)	特記事項
SP011	CC23	31	17	
SP012	DV18	36	17	
SP013	DV18	30	14	
SP014	DU19	32	9	
SP015	DU19	21	19	
SP016	DU19	50	13	
SP018	CC26	29	3	
SP019	CC26	32	21	
SP021	CB25	40	24	
SP022	DT20	58	43	
SP023	DV22	26	3	
SP024	DU18	26	14	
SP025	CD23	22	9	
SP029	DX18	48	45	
SP030	DX18	48	38	
SP031	DW18・19	44	18	
SP032	DW19	31	7	
SP033	DX17	36	38	
SP034	DX17・18	32	10	
SP035	DW18	34	23	
SP036	DW19	36	46	
SP037	DV19・20	38	41	
SP038	DV20	32	38	
SP039	DV16・17	53	46	
SP040	DV17	32	23	
SP041	DW18	42	31	
SP042	DX17・DY17	28	24	
SP043	DW16	64	40	
SP044	DW17	28	20	
SP045	DW16	32	13	
SP046	DW17	28	9	
SP047	DW17・18	22	7	
SP048	DW18	24	10	
SP049	DV17・DW17	28	11	
SP050	DV17	30	9	
SP051	DV17	32	9	
SP052	DV17	22	10	
SP053	DV17	22	5	
SP054	DV17	22	12	
SP055	DW18	28	15	
SP056	DV18	26	22	
遺構No.	位置 (グリッド)	長径 (cm)	検出面からの 深さ (cm)	特記事項
SP057	DV19	40	8	
SP058	DV19	24	14	
SP059	DV19	26	6	
SP060	DV19	34	7	
SP061	DW18・19	18	8	
SP062	DU18・19	(30)	14	
SP063	DU18	20	25	
SP064	DU18	34	18	
SP065	DU19	30	10	
SP066	DU19	26	10	
SP067	DU19	18	15	
SP068	DU19・20	24	15	
SP069	DU20	32	12	
SP070	DU19	20	7	
SP071	DU20	32	11	
SP072	DT19	16	12	
SP073	DT19	24	12	
SP074	DT20	26	12	
SP075	DV20	18	4	
SP076	DU20・21	34	11	
SP077	DV20・DW20	28	8	
SP078	DV20	22	10	
SP079	DV21	28	10	
SP080	DV21	28	6	
SP081	DV22	20	5	
SP082	DV21	28	11	
SP083	DW20	23	8	
SP084	DW19	34	24	
SP085	DY20・21	34	33	
SP086	DY21	30	24	
SP087	CA21	30	10	
SP088	CD22・23	24	15	
SP089	CD22・23	24	4	
SP090	CB22・23	28	17	
SP091	CB23	34	17	
SP092	CB23	25	23	
SP093	CB24	32	17	
SP094	CB24	22	9	
SP095	CA24	24	16	
SP096	CC26	40	14	

第3表 小穴一覧表

第4章 総括

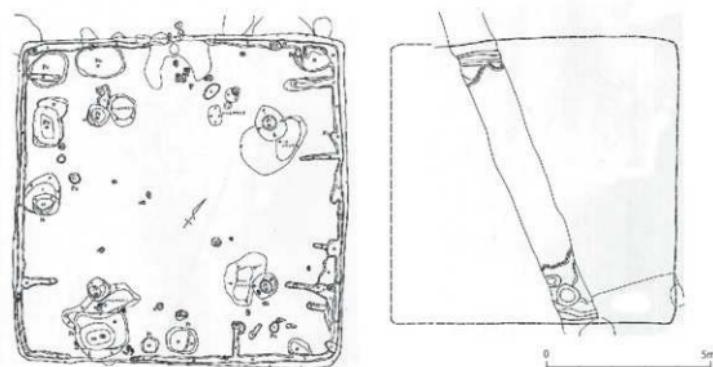
今次調査では古墳時代の大型竪穴建物や奈良時代の竪穴建物群など、大きな成果が得られた。本章では調査成果をまとめ、今後の課題と展望を提示したい。

第1節 古墳時代の竪穴建物 SI006について

今次調査で確認された古墳時代中期の竪穴建物である。全体からするとごく一部の調査にとどまったが、床上から遺物が多数出土した。また、建物の床および壁には被熱した痕跡が認められ、床付近の埋土中から多量の炭化材が検出された。

構造と類例 当建物は方形に復元した場合の規模が1辺8.4m程度と推定され、古墳時代の竪穴建物としては大型の部類に入る。また、鉄器及び砥石、土師器の杯が卓越する。同時期でこの規模・構造に近い竪穴建物として、前の原遺跡26号住居址がある(第22図)。当該建物は昭和63(1988)年度に竜丘保育園建設に先立つ調査で確認されたもので、建物全体が調査された。一辺11.4mの方形を呈し、北壁にカマドを1基そなえつけ、間仕切りをもつ。SI006と同様に土師器杯が多く出土しており、当建物と同時期に比定される。前の原26号住居址は今次調査区から700m程南の地点にあり、同時に2つの大型建物が桐林地区に併存したこととなる。このような中期の大型竪穴建物に注目した西山克己は、導入期のカマドと間仕切りをそなえることを特徴としたうえで、県内における類例は伊那谷と善光寺平周辺に限られるとし、積極的に外来文化を摂取した新興在地勢力の存在を読み取る(西山2002)。カマドや間仕切りの有無は不明だが、規模や出土遺物からして、SI006もこれらに類する竪穴建物といえる。

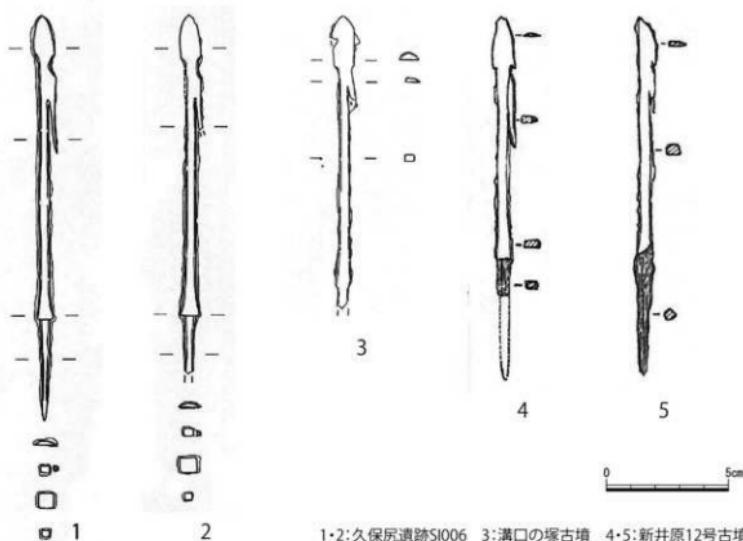
出土遺物 当建物で注目すべきは、武器である鉄鎌、工具の鉄鉈、砥石が多数出土したことである。このうち長頸鎌(12・13)は2点とも別造りの片脇抜をもち、「逆刺独立三角・柳葉形鉄鎌」(関1991)、「独立片逆刺長頸鎌」(鈴木2003)とも呼ばれる。鎌身闊はナデ闊で、脇抜が非常に細く



1:前の原遺跡26号住居址

2:久保尻遺跡SI006

第22図 竜丘地区的古墳時代大型竪穴建物



第23図 飯田市出土の別造り片脇挟をもつ長頸鎌

造り出されていること、全長が16cm以上に及ぶことから、この種の長頸鎌の中でも古相の特徴を示す。鈴木一有はこの鎌について、鉄製甲冑との共伴率が高いことから、畿内王権との強い政治的紐帯を表す特殊な矢鎌と位置付ける。飯田市内では、座光寺地区の新井原12号古墳（帆立貝形古墳）、上郷地区の溝口の塚古墳（前方後円墳）から出土している（第23図）。前者は鎌束で複数、後者は1点のみであり、保有形態は異なるものの、双方とも竪穴式石室を主体部にもつ上位の首長墓である。また、いずれも短甲と共に伴することから、飯田市域の各勢力と畿内王権との密接な関係を示す遺物といえる。久保尻遺跡および溝口の塚古墳出土例はナデ闇で、新井原12号古墳出土例は鎌身が三角形のものと片刃の鎌身に片脇挟がつく特殊な個体がそれぞれ報告されている。久保尻遺跡例は新井原12号古墳例よりも古相に位置づけられる要素を具えるが、大きく製作時期が異なるとは考えられない。なお、平根鎌も二重の脇挟をもつもの（15）、鎌身中央部に2孔が穿たれたるもの（16）があり、特殊性が認められる。

古墳時代の竪穴建物から鉄鎌が出土する事例は列島各地で散見される。関東の竪穴建物出土鉄鎌を集成した箕浦紘によれば、別造り片脇挟の長頸鎌が竪穴建物から出土した事例は非常に少ない⁽¹⁾。また、集落出土鎌において、建物の一部の調査にも関わらず、5点もの鎌が建物1棟から一括で得られること、5世紀代の建物から長頸鎌と平根鎌が同時に出土することも稀な現象といえる（箕浦2019）。このように当建物の鉄鎌は、出土数や型式においても特別な位置づけがされるべきものといえる。これらは束ねられることなく床上に1点ずつ散在しており、建物廃絶に伴い儀礼的な廢棄が行われた可能性がある。焼失家屋である点も考慮すべきであろう。

建物の時期と性格 長頸鎌の年代は、水野敏典による中期鉄鎌編年（水野2003）の中期三段階、川畠純による前・中期鉄鎌編年（川畠2009）のIV期古段階にあたる。共伴した土師器類の編年（山

下 1999)から見ても乖離はなく、建物の廃絶時期は古墳時代中期中葉である。当建物は通有の堅穴建物と比べて明らかに大型であり、一般的な住宅とは性格を異にする。加えて、別造りの片脇抜をもつ長頸罐をはじめとする鉄器類が多数出土したことから、畿内と関係を有する首長あるいは集団の存在が推察される。当地点から新川を挟んで 700 m ほどの地点には、中期の前方後円墳とされる権現堂 1 号古墳がある。また、南に 1 km ほどの位置には同じく中期の兼清塚古墳、丸山古墳、大塚古墳の 3 基の前方後円墳が集中する。SI006 が所在する久保尻遺跡は、これらの古墳の母体となった集団の居住域のひとつと考えられ、前の原遺跡と並行する中期の集落に数えられる。以上のように SI006 は、飯田と畿内王権との関係を考えるうえで重要な遺構であるとともに、桐林・駄科の古墳時代勢力の展開をみるうえでも看過できない。

第2節 焼成坑 SK004について

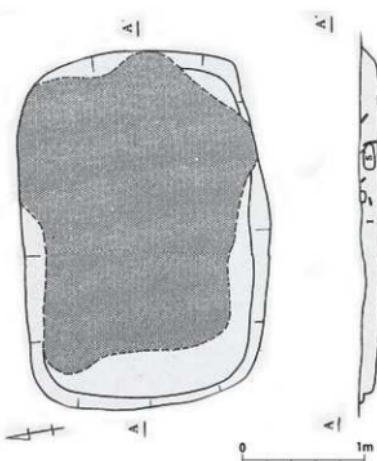
本遺構は不整四角形を呈する土坑で、何らかの焼成行為を行った「焼成坑」である。

焼成坑の性格として、「土師器焼成坑」と「製炭土坑」があることが知られている。各地の事例をもとに土師器焼成坑を定義した木立雅朗は、土師器焼成坑の必要条件として以下の 3 点を挙げている(木立 1997)。

- ① 挖り込んだだけの単純な土坑であること（それ以外の固定的な施設をもたない）
- ② 土坑床面が赤色に焼けていること（壁面のみが赤色に焼けたものは除外する）
- ③ 炭・灰・赤色焼土の塊～粒が原位置で確認され、その土坑で直接火を使ったことが明確であること（2 次堆積のものは除外する）

報告文中で述べたように、SK004 は、①、②、③ の条件すべてを満たすといえる。したがって、本遺構の性格は「土師器焼成坑」と評価できる。望月精司による分類の A 類（平面方形・長方形・逆三角形に構築され、奥壁・側壁を中心に被熱が広がる）に該当し、A 類のなかでは II 類（縦長指向かつ逆台形に近いもの）にあたる（望月 1997）。県下における焼成坑をまとめた山田真一によると、松本市や長野市などで比較的多く確認されているものの、南信地域ではこれまでに報告例がなく（山田 1997）、貴重な事例である。

県内の事例をみると、平安時代とされる松本市の宮の前遺跡の類例（第 24 図）が近い特徴を有する。長方形を呈し、縦軸長は 296cm を測り、SK004 と比べてかなり大型であるが、被熱の広がり方は類似する。当遺跡の SK004 では焼成されたと考えられる遺物が出土しなかったため直接的な時期比定は困難だが、本調査区域が奈良時代集落域であることや、望月 A 類の焼成坑が主として古代に用いられたことから、奈良時代の土師器焼成坑の蓋然性は高いと考える。古代の土師器窯については、中信と南信で細部の技法に違いが指摘されている（直井 1996 ほか）。本遺構は、このような土器の地域性や生産体制を考察するうえで、基礎的な資料になりうる。今後の実態解明に期待したい。



第 24 図 松本市宮の前遺跡 土師器焼成坑

第3節 奈良時代集落とその性格について

奈良時代の竪穴建物が3棟確認された。今次調査で確認された集落は、恒川編年において古代3期から4期に該当し、奈良時代中葉～後葉（8世紀中頃～後半）に比定される。座光寺の伊那郡衙周辺を除くと、上郷地区の堂垣外遺跡、松尾地区の田園遺跡、妙前遺跡などで奈良時代の集落が確認されているが、竜丘地区での集落跡は安宅遺跡や小池遺跡などの調査例があるのみで、久保尻遺跡における奈良時代集落の発見は多くの示唆に富む。

各建物から出土した土器類は、須恵器を主体とすることに特徴がある。特に食器については、土師器はまったくみられず、須恵器のみで構成される。この須恵器主体の土器組成は、当地域の奈良時代後期から平安時代初期の特徴とされる（小平2003ほか）。須恵器の供給元が問題となるが、当遺跡に隣接する須恵器窯として、宮洞窯跡群が有力な候補となる。宮洞窯跡群は竜丘地区を流れる駒沢川上流の山間地に開かれた登り窯で、このうち本格的な発掘調査がされたのは1号窯と3号窯である。3号窯は当地方で最初期の須恵器生産を担った窯とされ（遮那1987）、操業は8世紀中葉とみられている。1号窯はそれに続く8世紀末～9世紀初頭とされる。

今次調査でSI005から出土した盤（21）は律令期に登場する特徴的な器種で、宮洞3号窯で比較的多くの製品が報告されている。飯田市上郷考古博物館所蔵の当窯出土資料を実見したところ、個体ごとに形態差が大きく、製作技法や器高・器径、胎土等がSI005の盤と一致する製品は認められなかつた。ただし、本例と同様に焼成が甘くわめて軟質な一群は窯資料中に認められたことから、奈良時代に操業した竜丘の古代窯群のいずれかで生産された可能性は高いと考える。今回は窯出土資料について悉皆的な分析を行ったわけではなく、推察の域を出ないが、窯に近接する久保尻遺跡の奈良時代集落では宮洞窯で生産された須恵器が直接搬入され、使用されていたとみられる。これらの生焼け傾向の一群に対し、SI007カマド内出土の無台杯および有台杯（第25図）は焼き上がりが良く硬質で、胎土中に礫や砂粒がきわめて少ない。宮洞3号窯の資料中には同様の製品はまったく認められないため、これらはおそらく地域外からの搬入品であろう。奈良時代は伊那郡下において須恵器在地生産の開始段階であり、在地品と搬入品が混在する状況が改めて確認できた。天竜川対岸の龍江地区で上の城窯、萩の平窯など多くの須恵器窯が操業を開始し、郡内の自給体制が整うのは、平安時代初期とされる（山下2019）。

以上のように、当遺跡における奈良時代集落は、宮洞窯の操業時期にほぼ並行すると考えられる。竜丘地区では、駄科の安宅遺跡で規格性のある掘立柱建物群と杭列が確認されており、律令期に地域拠点的な役割を担っていたとみられる。当遺跡は安宅遺跡と新川を挟んだ対岸に位置し、宮洞窯から直線距離で1kmほどの近場にある。高台に造営された古代寺院の前林廢寺に近接することも興味深い。この立地環境は、当遺跡が須恵器窯や古代寺院と密接に関係しつつ、拠点的な集落として発展した可能性を示唆する。さらなる検討を要するが、当遺跡の奈良時代集落は、律令制下における伊那郡の地域内支配や生産・分業体制を考察するうえで参照されるべき事例である。



SI007 (No.28)



SI007 (No.29)

0 (1-3) 10 cm

第25図 搬入品とみられる須恵器

第4節まとめと展望

今次調査では、古墳時代の大型建物、奈良時代の集落、土師器焼成坑の確認が大きな成果として挙げられる。古墳時代中期の大型建物が存在し、奈良時代にも集落が発展することは、竜丘といふ一地域の性格や動向を考えるうえで貴重な成果となった。古墳時代にヤマト王朝との強固な関係をもつて駿科・桐林に成立・展開した竜丘の首長層は奈良時代までに結集し、ひとつの地域的な勢力として伊那郡衙の傘下に入り、古代寺院を擁すこととなったのではないだろうか。このような背景から、古墳時代に集落が発達し、奈良時代にも須恵器窯や古代寺院に隣接する久保尻地籍に集落が継続して営まれたと推察する。

なお、多くは触れられなかったが、中世遺構の存在から、当該時期には屋敷地であった可能性があり、鈴岡城に展開した小笠原氏との関わりも含め、今後の課題としたい。

最後に、調査にあたり多大なるご理解とご協力をいただいたみなみ信州農業協同組合様、並びに調査や整理作業の実施にあたってご指導くださった皆様方に深く感謝申し上げる。

註

(1) 箕浦氏より、松本市山影遺跡（松本市教育委員会 1993）より別造り片脇抉をもつ長頸鐵1点が出土していることをご教示いただいた。よって、管見による限り、当遺跡は県内で同種の鐵が竪穴建物から出土した2例目となる。また、関東では栃木県宇都宮市砂田遺跡（とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2002）で1点が出土しているが、ほかに確実な報告例は知られていないことである。

引用・参考文献

- 伊藤 尚志 2005 「第Ⅱ章 古代の土器」『恒川遺跡群—遺物編その1（古代・中世）』、飯田市教育委員会
- 川畠 純 2009 「前・中期古墳副葬鐵の変遷とその意義」『史林』92-2
- 木立 雅朗 1997 「土師器焼成坑の定義と型式分類」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会
- 小平 和夫 2003 「飯田盆地における古代集落の展開」『信濃』第55巻第2号
- 述那 藤麻呂 1987 「伊那谷南部在地生産須恵器の実態」『長野県考古学会誌』55・56号
- 杉井 健 1999 「瓶形土器の地域性」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集
- 鈴木 一有 2003 「古墳中期における副葬鐵の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集
- 閔 義則 1991 「逆刺独立三角・柳葉形鉄鐵の消長とその意義」『埼玉考古学論集—設立10周年記念論文集』、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 藤澤 良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10
- 直井 雅尚 1996 「信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相」『鍋と甕 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム

- 西山 克己 2002 「下伊那の古墳群形成と伊那郡衙の成立」『長野県の考古学Ⅱ』 長野県埋蔵文化財センター
- 水野 敏典 2003 「古墳時代中期における鉄鏃の分類と編年」『権原考古学研究所論集』第14 奈良県立権原考古学研究所
- 箕浦 純 2019 「古墳時代関東における集落堅穴建物跡出土鉄鏃の分布と組成」『考古学集刊』第15号、明治大学考古学研究室
- 望月 精司 1997 「土師器焼成坑の分類」「古代の土師器生産と焼成遺構」窯跡研究会
- 山下 誠一 1999 「(4) 南信地域の様相」「長野県における古墳時代中期の土器様相—屈曲脚高杯の出現から消滅までの予察—」『東国土器研究』第5号 東国土器研究会
- 山下 誠一 2004 「飯田盆地における古墳時代後期集落の動向—発掘された堅穴住居址を基にして—」『飯田市美術博物館紀要』第14号
- 山下 誠一 2019 「第Ⅳ章 まとめ」『上の城窯跡 萩の平窯跡 龍江孤塚遺跡』飯田市教育委員会
- 山田 真一 1997 「甲信」「古代の土師器生産と焼成遺構」窯跡研究会

報告書等

- 飯田市教育委員会 1968 『内山、花の木発掘調査報告書』
- 飯田市教育委員会 1975 『前の原・塚原』
- 飯田市教育委員会 1990 『前の原遺跡』
- 飯田市教育委員会 1996 『久保尻遺跡』
- 飯田市教育委員会 1998 『内山遺跡』
- 飯田市教育委員会 2001 『溝口の塚古墳』
- 飯田市教育委員会 2002 『前の原遺跡 IV』
- 飯田市教育委員会 2019 『上の城窯跡 萩の平窯跡 龍江孤塚遺跡』
- 今村 善興・小林 正春 1987 『新井原12号古墳』『長野県史 考古資料編 主要遺跡(中・南信)』長野県史刊行会
- 松本市教育委員会 1982 『松本市宮の前遺跡』
- 松本市教育委員会 1993 『松本市山影遺跡緊急発掘調査報告書』
- とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2002 『東谷・中島地区遺跡群2 砂田遺跡(1区・2区・3区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第256集

挿図出典

- 第22図 飯田市教委 1990 および本報告書掲載図面をもとに作成
- 第23図 今村・小林 1983、飯田市教委 2001 および本報告書掲載図面をもとに作成
- 第24図 松本市教委 1982 をもとに作成
- 第25図 本報告書掲載図面をもとに作成



調査前



調査区全景

写真図版 2



SI006



同 北壁際の被熱及び焼土等堆積状況



SI006 南壁付近炭化材検出状況



同 廃絶後投棄遺物検出状況

写真図版 4



SI006 土師器杯出土状況



同 鐵鏃・砾石出土状況



S1005



同 須恵器盤・壺等出土状況

写真図版 6



SI020



同 カマド内外遺物出土状況



SI020



SK004

写真図版 8



SK003



同 土師器出土状況



ST017



調査区南側の小穴群

写真図版 10



田中古墳付近（調査前）



同 土層堆積状況



8



9

SI006 出土土器 (1)

写真図版 12



SI006 出土土器 (2)



SI006 出土鉄器・砥石



久保尻遺跡出土奈良時代土器



SI005 出土土器・SI007 出土土器（1）

写真図版 14



SI007 出土土器 (2) · SI020 · SP029 · ST017 出土土器



SK003 出土土器

報告書抄録

ふりがな	くほじりいせき					
書名	久保尻遺跡					
副書名	JAみなみ信州竜丘支所新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
編著者名	春日 宇光					
編集機関	長野県飯田市教育委員会					
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地					
発行年月	2021年3月					
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	市町村番号 遺跡番号	北緯 ○○°○○'○○"	東経 ○○°○○'○○"	調査期間	調査面積 調査原因
くほじりいせき 久保尻遺跡	飯田市桐 林923番地	20205	35° 28'	137° 49' 24"	2019/7/17 ～ 2019/8/30	220m ²
		221				緊急発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
久保尻遺跡	集落	古墳時代 奈良時代	堅穴建物4、 土坑4、焼成 坑1、溝1、集 石墓1、 小穴群	須恵器、土師器、鉄鎌、 鉄鏟、刀子、砥石	古墳時代堅穴建物から 鉄器等が出土 土師器焼成坑	
要約	<ul style="list-style-type: none"> ・古墳時代中期の大型堅穴建物1棟から鉄器（長頭鎌、平根鎌、鉄鏟）、砥石、土師器等が出土。 ・奈良時代の堅穴建物3棟から、須恵器、土師器、刀子が出土。 ・縄文・古墳時代の土坑、時期不明の土師器焼成坑を確認。 ・中世とみられる小穴群を多数、集石墓1基を確認。 					

久保尻遺跡

2021年3月発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534
飯田市教育委員会

印刷・製本 飯田共同印刷株式会社

